いさな

のの

強烈な夏の日差しが、空の高みまで張り出している白い入道雲をさらに白く輝かせている。
そのせいで空全体が強い光をはね返しているようだった。
表の木戸を開けた途端まばゆい光線に目を射貫かれ、少年は瞼をグリグリと擦った。
彼の剥き出された腕は小麦色とは程遠いほどに濃い褐色をしている。
それでも今年はまだまだ焼けるだろうと、本人も家族も確信していた。
彼が自転車のスタンドを跳ね上げると、その音を聞きつけたのか三十も半ばの女が台所の窓から顔を覗かせる。
少年の母親である。
「いさなっ！海へ行くの？」
「うん」
ところが彼女は門の辺りに誰もいないことに気付いて眉根を寄せた。
「一人で行くのはやめなさい！」
母親の甲高い声に、うんざりした顔で天を仰いだ少年は、まだ薄い肩をすくめて
「途中でタッちゃんを迎えに行くよ」と。
まだ何か言いたげな母親を無視して大きすぎる自転車に斜めにまたがると、滑るように浜辺への道へと飛び出して行ったのだった

五月蝿い女教師のように体の底からガンガン響く油蝉の声が辺りには木霊している。
きっとこの騒音と井戸水に浮かぶ西瓜がなくては夏も味気ない物になるのだろう、といさなは思うのだが、それでもこの苛々しい響きは、体の奥の方からムカムカした感覚を引き出すのだ。

自転車のハンドルをグッと掴み直し、まるでその声から逃げようとでもするかのように少年はさらに力をこめてペダルを漕いだ。

たつおの家の庭とも道ともつかない辺りを突っ切り、西瓜畑を越えて海に続く大きな坂を上り切った頃には、汗がシャツをぐっしょりと濡らしていた。
坂の上から海をじっと見つめてから、いさなは一度つばをのみ込む。
干上がった咽を湿らせてから勢いよく地面を蹴った。
潮の匂いのする湿った風が、少年の体一杯に吹きつけた。
汗や果汁のしみが目立つランニングシャツが後ろで大きくはためくと、時に冷えた布地が肌に触れて爽快な気分になる。
そのうちに熱い砂浜がぐんぐん近付いてきた。息苦しいほどに温められた熱風が勢いよく渦巻いて少年を包み込む。
いさなは砂に車輪を取られて傾きかけた自転車から飛び降りると、鉄板の上ではねる油さながらに高く飛び上がりながら湿った波打ち際へ急いだ。

丁度よく打ち寄せてきた波が、ヒリヒリとした足の裏を冷たく癒してくれる。

暫くずぶずぶと砂に埋まっていく自分の足を呆然と見守っていたいさなは、それがくるぶしまで埋まったところではっと我に返った。
「くそっ」
勢いよく足を引き抜いて、少年はすばやく服を脱ぐと、次々と迫ってくる波に向かって突進した。

海の果ては遥かに遠い水平線で一直線に結ばれている。
その上に巨大な入道雲が起き上がり、白い光を照り返していた。
空の高みのその極を少々下がった太陽は、放つ光を波頭に乗せ、砂利の混じった砂浜へ泡とともに吸い込まれていく。

入り江にたまったカモメが打ち上げられたカニや海藻を啄ばんでいた。
少し離れたところには、黒々とした複雑極まりない岩々が頭を出し、その辺りでは奇妙なうねりがとぐろを巻いている。

いさなはひとしきり泳いでから浜にあがると、冷えた体を熱砂の上に投げ出した。
浜には人影もなく、海鳥と潮の幽かな響きだけである。時々船の汽笛がボーっと聞こえもしたが深い青に吸い込まれて沈んで行った。

いさなは大分暫くの間浜辺に寝転がっていた。
真上の空にはあの遠い入道雲はまだ見えず、ただ青いばかりだ。
カモメが数分に一度スウッと滑っていく。ただそれだけだった。

背に敷かれた熱い砂は少年の背に喰いつき、爪を立てて酷い痛みを与える。
いさなはとうとうその痛みに耐え切れなくなったのか勢いよく飛び起きた。

打ち寄せてくる波に逆らい、それを掻き分けるように海へ入ると、水に流されるように痛みが引いていく。
その心地よさをもっと満喫するために、いさなは頭までその塩辛い塩水に使った。

思った通り顔面の火照りも速やかに引いていく。
いさなは一度顔をあげると、もっと深く潜り続けるために大きく息を吸った。

海の中では海面よりも底のほうが泳ぎやすい。
底砂ぎりぎりにひどくゆっくり泳いでいると、自分が本当に魚になったような幻想に捕らわれる。それはとても気持ちのいいことだった。

何度か潜ったり出たりを繰り返していると、不意に何か光るものが目に付いた。
それは幽かな太陽光を受けて水中の砂の中でチロチロと燃えている。
少し深いところだったがいさなは思い切って水を蹴った。一度息継ぎに上がればもう見失ってしまうだろうと思われた。

ところが水深は思ったよりも深く、なかなか光には手が届かない。
しかも水眼鏡には海水が浸入し、いさなを苛立たせ、焦らせた。
息苦しさと眼前で揺れるうっとうしい水で、いさなはその青く光るものへねらいを定めることがほぼ不可能になっていた。
しかしそれでも光のあるだろうと思える方角へ目いっぱい手を伸ばし、海底の砂をゴッソと掴んだのだった。

飲み込んでしまった塩水でむせながら、いさなは乱暴に浜へ上がった。
やっと息切れが収まった頃、彼は手の中にある硬い物質に気が付いた。
しわくちゃにしなぶれた手をゆっくりと広げてみると、握り締められた灰茶色の砂団子から青い硝子球がはみ出している。
「ビー玉か……」
表面についた砂を払ってその球体を確認したいさなは少し気落ちした声で呟いたが、そう落胆したわけではなかった。
手の中の硝子球は太陽に翳すとまるで青い炎のように燃え上がったし、海の中にあったというだけでそれは何にも勝る価値を備えていた。
そして何と言っても、いさなは前々から大きな青いビー玉が欲しかったのだ。

かつて幼馴染から見せてもらったビー玉の山。太陽の光を受けてきらめく数々の硝子球の中でも、青いそれは特別魅力的だった。

今あるこの青いビー玉は、以前見たそれと寸分違わぬ色と大きさだった。直系は優に三センチはあるだろう。四センチ近いかもしれない。
その巨大な球体は、完全な青ではなく少し翠がかったマリン・ブルーをしている。
そして陽光を複雑にはね返して、覗きこむいさなの顔を深い海の色に染め上げた。

いさなは自分の右眼にその宝石をあてがった。
青い炎が視界いっぱいに燃えていた。

身を寄せ合って立ち並ぶ家々の窓からは、食欲をそそる匂いが溢れだし、通り一杯に充満していた。
真っ赤に染められた村道にはただ潮の響きだけ。時々聞こえる風鈴の音が、さらに静寂を深めている。
実際その道に踏み込めば、どの家からも笑いやざわめきが漏れ聞こえてくるのだが、それらの楽しげな音色はどれも他者の介入を頑なに拒んでいて、いさなは尚更の孤独を感じざるを得ない。
村内で唯一『喪中』の札が立っている家からは流石に笑いは聞こえてこなかったが、少年はその家の前では特に自転車を飛ばして突っ切った。

「ただいま」
立て付けの悪い玄関の戸をガタガタ言わせながら開けて、いさなは油の匂いが立ち込めている家の中へ入った。どうやら今夜は天婦羅らしい。
いつもどおりまず台所に顔を出すと、案の定母親が天婦羅を揚げている。その腰の辺りでは妹のしづがうろうろと母のオテツダイに精を出していた。いさなは妹を押し付けられる事態を危惧してこそこそと子供部屋へ急いだ。

「今日、龍夫君が迎えに来たわよ」
ご飯を手渡しながら母親はいさなの方をチロリと睨んだ。
「二人で海に行くんじゃなかったの？」
いさなが返答できずに唇を尖らせていると、麦酒を飲み干した父が空のコップをドンッと置く。
真っ白な泡がコップの周りにぐるりとついていた。
「一人は危ないと言っているだろ」
「……大丈夫だよ。毎年一人でも行っていたじゃないか」
父親はそこで話から身を引いた。街から来た母とは違い、根っからの海の男である。父にとっても海は庭同然なのだ。
庭が危険であるはずがない。
「おい、もう一杯」
口の周りの泡を拭ってからコップを差し出した父は、母の鋭い視線でそれを引かざるを得なかった。
「あなた！もっと叱って下さい。一人は危険です――聞いているのいさなっ？」
身を乗り出すようにして母親はいさなの顔を覗きこむ。
その瞳の奥には心なしか不安の色が見え隠れしていた。
いさなはそれに気がついていたが知らぬ振りをして揚げられた小アジを頭から口に入れた。
しっかり火が通っているので骨までボリボリ食べられる。
大きなアジを塩焼きにするのも美味いが、刺の多い魚はこうした方が食べやすいので、いさなの家ではよくこういった形で食卓に並んだ。何と言っても活きがいいのでじわりと美味しい。

二匹目に手を伸ばしたところで母が再び覗きこんできた。
「いさな、草太くんのことを忘れたわけじゃないでしょう？」
魚を挟む寸前でいさなはその動きを止めた。
狙っていたアジをしづが横から掠め取る。
仕方なくいさなは別のアジを挟んだ。

ご飯とアジで口の中を一杯にしたいさなは苛立たしげに顎を上下に動かした。
「学校からも言われてるでしょう？海は危ないのよ」
みそ汁と一緒に口の中の物を飲み下してからいさなは、うるさい母の小言から逃げるためそそくさと席を立った。

満天の星空を見上げながら、いさなは手の中の硝子球を握り締めた。
それはひんやりとした冷たさでいさなの心を静めてくれた。
屋根の上だ。これも母親にはやめるように言われているが、少年はこの場所が気に入っていた。
昼間染み込んだ熱気は、すでに夜の闇の中に溶け出してしまっている。
リー、と虫の音が響いていた。
「いさな」
目線だけ足元へ向けた少年は、そこに父の姿を見つけた。
彼は「ヨッコラセ」と、年相応の掛け声をかけていさなの隣へ這い上がってきた。
パンツ一丁の父は夜目でも日焼けの跡が分かるほどに焼けている。
海パンで仕事をしているわけではないのでランニングシャツの跡だけがくっきりと白い。
麦酒を失敬してきたらしく、いさなに向かってアルミ缶を傾けてきた。
二口ばかり飲んでから顔を顰めてつき返すと父は可笑しそうに笑って残りを一気に仰いだ。いさなには麦酒のどこがそんなにおいしいのか分からない。ただ苦いだけだ。
「よっ」と寝転がった父は星を眺めながら息子へ語りかけた。
煙草と酒と汗の匂い。そこに微かに潮の香が混じっている。
ひどい匂いだが、いさなはなぜかその男っぽい匂いが気に入っていた。
まさあきの父さんは石鹸の匂いがする。そのせいで彼は皆にからかわれていた。「うしお」というのが彼のあだ名だ。なんでもまさあきの家の石鹸には牛のマークがついているとかでそうなったらしい。
「タッちゃん」や「よしぼう」といった単純明快なあだ名よりはいいかとも思うのだが、本人はそうでもないらしい。
ひどく憤慨し、「将来サラリーマンにだけは絶対ならない」と豪語していた。
ちなみにいさなのあだ名は、ない。
いっちゃんはいさむがとっているし、「勇魚」という名前自体そうそうあるものではないのでそのままが一番いいということになっている。
とにかく、父はぽつぽつと語りだした。

「母さんのなあ、母さんのことをうるさく思うんじゃないぞ」
リーという音が一瞬やんだ。
「あれは、おまえが心配なだけだ」
いさなは小さく頷く。それはちゃんと分かっていたから。
「でも、皆海へ行かないんだ。家の人が絶対だめだって」
フン、と父は鼻で笑った。どうして笑ったりしたのか、いさなには分からなかった。
「ここらはそうなのさ。俺がお前くらいの時にも一人、溺れ死んだ奴がいてなあ、その夏も酷いもんだった。浜には人っ子一人いねえってもんだ」
いさなは海に人がいなかったということよりも、過去にも溺れ死んだ人がいたという方に惹きつけられた。
聞こうかどうか迷っていると、父の方でそれを察したらしい。
「とおるっていう奴でなあ、俺とは、お前と草太くらいに仲が良かった。あいつも一人で海へ出かけて、そのまま溺れ死んじまった。確かじゃない。死体があがってないからな。流れが変になっているところがあるだろう。あそこにはまるともう無理なんだよ」
「そうたもあそこにはまったのかなあ」と、いさなは恐る恐る尋ねた。
「多分な」と、父は溜息と一緒に頷く。その眼差しは、遥かに遠い星空を見つめていた。
しばらく沈黙が続く。
銘々が、別々の、しかしひどく似かよったものを考えていた。

そうた。彼は生まれてからずっと一緒にいた親友だった。
同じ皐月生まれ。いさなの方が三日早く生まれた。
離乳する頃からは毎日いさなの家かそうたの家のどちらかに預けられていたという。
いつも隣にいた彼。それが当たり前だった。
夏になると毎年真っ黒になるまで焼けていたいさなと違って、そうたはいつでも白かった。
そういう人がたまにいる。いくら日にあたっても赤くなるだけという人が。
そしてそういう人はたいてい日光に弱い。そうたも例に漏れずそういった体質だった。
いつでもつば広の麦藁帽子を被っていた。少し長く日にうたれるとすぐに水疱ができた。
そのくせ、泳ぎは人一倍だった。
それだから、いさなは初めあの知らせを信じることができなかったのだ——。

七月も後半にさしかかり、そろそろ暑さも本格的になってきた頃、いさなは家の裏庭にある一本の柿木の幹をじっと見つめていた。
その視線の先端には、何か茶色い親指くらいの大きさをしたものがある。
蝉のさなぎだ。今丁度背中が割れて、まだ真珠色の体を外へ押し出そうとしている。
いさなは一心に見入っていた。
毎年いつの間にか乾いた抜け殻だけが木に引っ掛かっていて、脱皮をする瞬間を見るのは初めてだった。

背中の亀裂が徐々に大きくなっていく……
「いさな！」
今まさに頭が出ようという時になって、母が血相を変えて駆け寄ってきた。
彼女はいさなの腕をぐいぐい引いて表通りへ向かう。
普段なら文句の一つもつけるところだが――何と言っても蝉の脱皮だ――どういうわけかできなかった。
母があまりにも取り乱していたせいかもしれない。
その顔からは全く血の気が窺えないばかりか、自分が何をしているのかも理解していないらしく、つかまれた手首はきりきりと悲鳴をあげ、酸素が足りなくなった指の先にはおかしな膨張感が感じられた。
「――っ母さん。どうしたのさ！」
村の十字路まで来たところでやっといさなはその手を振り払った。
再び血液が流れ出したいさなの右手は、流れた血液でいさな自身も信じられないくらいに火照りだした。
自分の血の熱さに驚いていたいさなの目線にあわせてしゃがみこんだ母は、今度はその肩を強く鷲掴んだ。
気の早い蝉がジンジン鳴いている。
乾燥してバサバサした通りには誰の姿も見当たらなかった。
塩辛い風が母の細い髪をさらっていく。そこにきて初めていさなは母親の髪が乱れていることに気付いた。
額には汗が玉を結び、息も大分乱れている。
どうやらよほど急いで走ってきたらしい。
何か良くないことがあったのだといさなはなんとなく感じた。
「……いさな、草太くんがね」
母はさらに力をこめて肩を掴んだ。
それはもう、抱きしめていると言ってもいい。
「草太くんが、海で行方不明になったのよ」

確かにその日、いさなとそうたは海へ行く約束をしていた。
夜釣りをしようと言って、日が暮れたら夕飯をもって大岩のところで落ち合うはずだった。
彼の母親も夜釣りに行くときの簡単な弁当を作ったこと、息子がそれを忘れて行ったことを年季の入った警官に答えていた。
そして彼女がそれを届けに海へ行ったときには、そうたの姿は消えていたのだ。
誘拐の線も考えられたが、村の漁師が数人、海で泳いでいるそうたを見ていた。
いさなが来るまでに一泳ぎしていたのだろう。
肌 の弱いそうたは、そうやって日の光の弱い夕方や朝方に泳ぐのが好きだった。それは村中が知っていたし、そういった時間帯に泳ぎだしたそうたが、本当に周り が止めるまで何時間でも泳ぎ続けることも有名だったため、誘拐の可能性は極めて低いだろうということで警察も村中も納得

した。
死体は未だあがっていない。
しかし、見切りをつけたそうたの父親が嫌がる妻を振り切って一週間前に葬式をあげた。
終業式の日だ。
一緒に花火をするつもりだったのに。
準備してあったそれらはまだ押入れの中にしまってある。

闇は、深い深い黒。全てのものを、その渦の中心に引きずり込む潮の気配。
いさなは、今にもこの体がスウッと天空へ昇っていって、その重く黒い水に包まれてしまうのではないかと思う。
引き込まれるものか、と歯を食いしばってみるが、その一方で夜の波を十分体にうけている。
その流れに全て任せてしまいたいと、そう思う自分がいる。
ザアッと波の音がした。海辺の村では年中波音が途絶えることがない。
だが、変わる。
今は夏の涼しげな、少し気だるげな音を浜へ打ち上げていた。
「あ、流れ星」
夜空に唐突に現れた一点が、左下方に斜めに滑った。
それはほんの瞬く間の出来事で、気付いたと思った次に輝きは消えている。
こんなに短い間で願い事を三回言うなんてできるはずがない。
いさなは丸く開けた口をゆっくりとした動作で固く引き結んだ。
三回言うことなんてできない。神様は願いを言わせてさえくれない。
果たして実現可能な願いであれば、口に出させてくれるだろうか。
ずうっと長い流れ星が夜の空を流れるだろうか。
唇をもごもごと動かしながら、いさなは思案する。

「父さん、西瓜を食べようよ」
いさなは井戸水に浸けてあった球体を思い出した。
二人してこっそりと屋根を降りると、冷たい水にぬれている緑色の西瓜を台所へ運んだ
。母と妹は風呂に入っているようだ。しづの陽気なはしゃぎ声が響いてきた。
父は黒縞のついた西瓜を四つに切り分けるとそのうちの一切れをいさなに手渡し、自分も一切れ持って縁側へ向かった。
そこで食べれば、種をいちいちお椀に出さなくてもプッと庭へ吹き出せば良いので楽なのだ。
父の隣に腰掛けると足元にはまゆみの家のトラ猫がいた。何かをねだるようにナーと鳴くので、いさなは煮干と牛乳を取りに再び台所に駆け戻った。

「ねえ、父さん」
種を勢いよく飛ばした父は「うん？」といさなへ注意を向けた。

夜の闇の中に吹き飛ばされた西瓜の種はすぐにその黒と混じって見えなくなる。
「どうして昔の時も海にいく人が少なかったのさ」
いさなも父のように種を勢い込んで飛ばしたが失敗。黒い粒は自分の足に張り付いた。
振り落とそうと足をブンブンいわせると、種と一緒にトラ猫も逃げて行った。
父は口の周りを腕で拭ってから闇を見つめる。
「ここは古い村だからなあ。年寄りの流す噂が沢山あるのさ」
「ウワサ？」
「あぁ、噂だ。海で子供が死ぬとその子の幽霊が他の子も攫っていくと言うんだ。お前は聞かなかったのか？」
「う、ん」といさなは曖昧に頷いた。家には年寄りがいないし、最近はボウッとしていたから聞いても覚えていないのかもしれない。
「でも、そんな噂で皆が海へ行かないなんて変だよ」
「そうだなぁ！」
父は大声で笑いながら頷いた。
「俺はその年にも海へ行ったけれど幽霊なんて出なかったぞ」

翌日もいさなは海へ出かけた。今度は途中でたつおを誘った。
「たぁつぅおくぅん」
呼んだ途端中から騒がしい音がして、肥り気味の少年が出てきた。パンパンに突っ張った頬の肉が、目の隈の部分を押し上げているようだ。彼の目は、道化師のように細い三日月形をしている。
転がるようにして飛び出してきた彼は、本当に土間へ降りる辺りで転がった。それでもニコニコ笑っている彼がいかにも彼らしい。いつでも笑っているたつおといると、こっちも楽しい気分になる。
「いさな！海だろう？海へ行くんだろう！」
興奮して顔を輝かせている彼は、尻餅を着いたままにいさなを見上げてきた。その肌は薄いピンク色をしている。豚の尻や牛の乳房のあの色である。元来日焼けの目立たない彼はそれでも例年との差が歴然としていた。
「うんそうだよ。海へ行こうと思ってたっちゃんを迎えに来たんだ」
細い目一杯に喜びを溢れさせた彼は、「ちょっと待っててくれよ」と言って尻をさすりながら奥へ駆け込んで行った。
数分せずにたつおは水泳袋を引っ下げて出てくると、いさなを押しのけて外へ飛び出して行った。

いさなが玄関先で自転車のベルをガチャガチャいわせている間に釣り道具の準備をして、たつおは生垣の裏にある自転車をとりに走っていく。
いさなは彼の家に着いた時点で生垣の向こう側の庭に一人の人物を確認していたので、あえてたつおの後は追わずに、ただ自転車を意味も無くかき鳴らしていた。
祖父母を早くに亡くしていたいさなにとって、老人というものは理解できない未知の生物に近かった。
それに、何にもまして、人に挨拶をすることが面倒くさかったのだ。
しばらく待ったがたつおはなかなか姿を現さない。ひとしきりベルを鳴らしてやはり遅すぎると感じた。
いぶかしんで手を止めると、緑の向こうから言い争うような声が聞こえる。
その声のうちの片方はたつおに間違いない。肉を頬張ったような彼独特の声を、いさなはどんな所にいても聞き分けることができた。
朝礼で校庭に集合した時でさえそれは容易なことである。
しかし、もう一方の声はいさなの耳を疑わせた。
庭にいた人物が誰かは分かっていたから、声の主は知っていた。
しかし、その声はいつものおっとりとしたそれとは違って、ひどく険があり、同時に人を尻込みさせるような妙な気迫が感じられた。
いさなはそっと生垣の裏を覗いてみた。

「なんでだよ婆ちゃん！」
「いつも言っているでしょう。海はいけません」
そこでは、たつおとは相対的に骨と皮ばかりの老婆が、しっかりと自転車のハンドルを握って孫を押し留めていた。
「ほらいさなも待ってるんだよう」
頭だけ覗かせている彼に気付いて、たつおは二重になった顎でいさなを示す。それで初めて気がついたのか、老女は背後を振り向いた。

まともに顔を合わせてしまったので、いさなは仕方なくお辞儀をする。普段しなれていないことは、少年へ奇妙な違和感を抱かせた。
「なあ、いいだろ？ばあちゃん」
『ちゃ』の音にアクセントを置いて、たつおは甘えるように祖母の顔を覗きこんだ。

いつもならそれで、孫に甘いたつおの祖母は大抵のことを許してしまう。
先日はそれでお小遣いをせしめたと言って、近所の駄菓子屋からいつもの倍もの菓子を買っていた。
しかし今日の彼女は許すどころか更に厳しい声をあげて、たつおを叱りつけたのだった。
するとたつおの顔がみるみるくしゃくしゃに歪んだ。元々泣き虫のたつおは、いつもはやさしい祖母に怒鳴られて我慢がきかなかったようだ。
耳まで真っ赤にすると、次の瞬間には大空を仰いでおいおいと泣き出したのである。

いつも通り村の中を突っ切って、途中の畑で熟れたトマトを二、三失敬し坂を上り、下って浜へ転がった。
今日の着地は失敗だ。顔から砂に突っ込んで、いさなの口の中にはジャリジャリした感触が気味悪く入り込んだ。
しかもトマトは一つ、胸の下で潰れている。赤く染まったシャツを広げて顔を顰めてから、いさなは、残ったトマトを脱ぎ捨てたシャツにくるんだ。近にある小さな河口に関を造って、その中に放り込む。
暫くすればシミも薄れてトマトも冷える。一石二鳥だ。

少年はかげろう砂浜を蹴って、眩しく輝いている波の間へ飛び込んだ。
海の底から水天井を見上げると、ゆらゆらとした光の縞が絶え間なく眩しい。

時に、いさなは思うことがある。
このまま水の中にずっと居られるのではないか。魚の尾をもつ人魚。鱗に覆われた半魚人。そんなもののように、海の中の生活は可能なのではないだろうか。

あちらにずっと霞んで見える、奥深いところで（穴の中かもしれない）ひっそりと、文字通り波に揺られ、抱かれながら眠りを貪り、気が向いたときに隠れ家を出る。
食べ物は、そう。この揺れている光の糸だ。もちろん月明かりで出来た糸が極上品。
しかし結局、息は苦しくなっていき、それに伴って夢は暗々とした淵へ沈んでいく。
ここをもう一息こらえれば、もしかしたらそんな生活が出来るかもしれない。それなのに、どうしてもいさなは足掻いてしまう。
水面に飛び出して、豊満な空気を体一杯に吸い込んでしまう。

少し息を切らしながら、いさなは広大な海をぐるりと見渡した。
さざなみ程度の小さな波が、細かな光を弾いている。
そうたは海の底で生きているのだ。悠々自適、気ままに過ごして、光の糸を食べている。
あんなに海が好きだったから。
彼の白い肢体が、暗い海の底で、流れるようにひっそりと泳いでいる姿を幻想するのはあまりにも容易い。
しかし、どうして彼は自分を連れていってくれなかったのだろう。
いさなは泳ぐのを諦めて砂浜に上がり、浜に近い辺りへポチャン。釣り糸を垂らした。
冷えたトマトをむしゃぶりながら、じりじりと焼けるような砂の上で呆っと、その細い糸が海に飲み込まれているカ所を見守った。

真っ昼間、しかもこんなに浜に近い場所で魚が釣れるはずはないし、いさなも釣りを楽しもうと思っていたわけではなかった。
ただ何となく何かをしていたいだけだ。
そうたを失うことで余ってしまった多くの時間を、いさなは完全に持て余していた。

友達は誰も海に来ない。元々近くには山も多くあるから、彼等にとってはどちらでも構わないことなのだ。
海が駄目なら山があるさ。暑かったら川にでも入ればいい。そんなものだ。
ある意味山のほうがて手近に何でも揃っている分楽しいところだった。
いさなも毎日誘われているけれど、なんだか行く気はしない。
そうたを忘れてしまったかのように山を駆けずり回ることは何か間違っていると思う。
彼等もいさなの気持ちを察してくれているのか、無理な誘い方はしなかった。
それでも、持て余した時間が歯痒くて、いさなはとりあえず海へ通っている。
海で、ただ思ったままに泳いだり寝転がったりしている。海に居ることで、そうたと共に居るような幻想をしているのかもしれない。

いさなにとって、そうたが消えたあの日から、海はそうたそのものだった。
この海の何処かにそうたが眠っているのかと思うとぞくりとすることもあるけれど、海はいさなにとって切り離せない体の一部だ。

海と――そうたと離れることは、手をもぎ取られる様なもの。
それを思うと知らず、身が竦む。生まれた時からずっと一緒の親友。自分の半身である彼を失うことは、いさなにとって限りなく死に近いものを感じさせる。
大袈裟かもしれないけれど、正直いさなは自分の隣にぽっかりと空いた空洞を感じて、一体どうしたらいいのか途方に暮れていた。

少年は釣りざおをざっくりと地面に突き刺して、その先端が見えるように寝転がりながらトマトの汁をしゃぶった。
見守るそれは波に合わせて揺ら揺らしている。
大部暫くたった。
もう、日は天頂に差し掛かって、いさなは昼飯に帰らなくては、と思った。
そこで立ち上がって竿を引き抜いた、その時だ。
グッと、竿に重みがかかったのである。
独特のあの重みを感じて、いさなはまさかと思いながらリールを巻く。
手応えは確かだけれど、大した獲物ではないようで、簡単に引き上げられた。

打ち寄せてくる波と一緒になって、白く輝く鱗が見える。
太陽の光を目一杯はね返しているせいで眩しい。
目を半ば閉じて、いさなは小さな疑問を抱いた。

（どうしてこんなに眩しいんだろう？）

そう思っているうちにも魚は巻かれる糸に引きずられ、いさなの手元に近付いてきた。そうすると、より一層強い光がいさなの目を瞬かせたのだった。
小さな魚が体を翻すたび、いさなの前では透明な光が跳ねた。

針を外した魚を手にとって、いさなはそれを食い入るように見つめた。
掌に乗っている小さな魚に、恐る恐るもう片方の手を被せる。
なるたけ光を入れないように気をつけて、両手の隙間から中を覗いてみる。
すると、手の中の魚がボウッと浮かび上がるように白銀に輝いていた。
目の錯覚なんかじゃない。いさなはごくりと唾を飲み込んで二度、三度試してみた。やはり光っている。太陽の反射ではない。魚自体が光を放っていたのだった。
それが太陽を受けると、なおさら白く、まぶしく輝くのである。

いさなは数分、これをどうしたものか迷っていた。
持って帰りたいけれど、父には昔から言われている。まだ小さな魚の子供は、どんな奴でも逃がしてやらなくては駄目だ、と。
それはこんなに珍しい魚にもやはり当てはまることなのだろうか。

迷っているうちにも白銀色の魚はエラを激しく開閉させて苦しんでいた。
いさなは少し残念そうな顔をしたが、それをそっと海水に浸けた。
どうせ家へ持って帰っても死んでしまうだろう。
そうとう長く水から出していたから、もう駄目かもしれないと思いながら（それでも少し、それを期待して）水の中に放ったが、白銀色に光る魚は、スウッと深みの方へ消えていった。
少年はやはり、少しだけ残念そうに溜息を吐いた。

その日いさなは、夕日の差し込む縁側で、魚の図鑑を広げた。
もちろん、今日見たあの光った魚が何であるのかを調べようと思ったのだ。
しかし案の定それは見つからなかった。

もっとも学者の使うようなちゃんとした図鑑ではない。
子供向けの、メダカだのザリガニだのが紙面一杯にデンッと胡座をかいているような図鑑だから期待はしていなかったのだが。

もしかしたらと思い、父にも聞いてみたかったが、生憎村の寄合で公会堂に行っていた。
仕方なく布団の上で大の字を描いて寝転がったいさなは暗い電球を見上げながら口をへの字にひん曲げた。
太陽の光を受けて一層輝く体より、海の深みに向けて仄かに光を放ちながら消えていく様子が、少年の脳裏に焼きついている。
いさなが望んで、手に入れることのできない、あの海の深淵に向けて、光る魚は還っていった。
知らず涙がにじんでくるのは、水中に沈んでいく白い魚の様子が、まるでそうたを彷彿とさせたからである。
彼が海中を進むさまは、まるで光を放つかのように白く見えたものであった。
光る魚とそうたの姿をかわるがわる考えているうちに、いさなは深い眠りの淵に沈んでいった。

翌日も快晴。裏が透けて見えるような青空。いさなは今日も自転車をこぎだした。
途中の獲物は胡瓜である。味はトマトに劣るが着地時に潰れないところがいい。
潰れるのが嫌なら浜へ突っ込むことをやめたらいいのだが、この暑い中、急激な坂を上った後の爽快感は捨てきれない。
いかにも『天然』の、うにょんと曲がった胡瓜を昨日と同じく水に浸けてから、いさなは網を取り付けた浮き袋を持って海へ駆け込んだ。
今日は牡蠣を捕るのだ。
向こうの方に見える岩場。あの更に向こう側は潮の流れが速くて危険だけれど、逆方向、南にある小さな岩場なら大丈夫だ。
それでも一人で行くのは初めてなので、いさなはいつもより少し、気を引き締めた。
普段はしたこともない準備体操なんかもやって万全だ。

岩場は一種の小宇宙の体をしている。
珊瑚礁ではないけれど、そこにはありとある生き物が旺盛な活動をしていた。さまざまな海藻が繁茂して、真っ赤なイソギンチャクが奇妙な触手をユラユラ波に揺らしている。それらの間ではフジツボなどの貝達が、黒いゴツゴツした岩にしがみ付いていた。
波に洗われて穴ばかりあいた岩の表をノソノソと歩く海牛はギョッとするほど鮮やか。真っ黒なアメフラシは笑ってしまいそうな位にずんぐりと不恰好だ。
群れる小魚。
ああ、むこうの塊はゴンズイ。
ちょこっと触るだけでコロンと剥がれ落ちるのがヤドカリだ。

いさなの目指している牡蠣は、それよりももっと底にある。
今年は人が来ないせいか、例年よりもどっさりあった。岩と見分けが出来ないくらい年季の入った殻に包まれて、びっしりと岩面にこびりついていた。
いさなは一度水面に顔を出して思い切り息を吸い込むと、頭からスッと沈んで行った。
まるでその一点に穴があいているかのように、きれいにスゥッと。
これが難しいのだ。
ここら辺の子は大体皆出来るけれど、たつおやかずまは太っているせいか尻が浮いてしまう。
それは非常にみっともない恰好なので、この場所に来るとき、彼等は決して潜ろうとしない。海面近くでちびた蟹や貝なんかを採集しているだけだった。
暫く浮いたり潜ったりして栄螺五個に鮑鰒二個、牡蠣五つを捕った。一人分にはそれで十分である。
いさなは食料調達に見切りをつけると昼のサイレンがなるまでの間、その岩場をめぐって遊んだのだった。

ウー、ウー、という甲高いサイレンの音を景気に水からあがったいさなは、貝の入った網をぶら下げて、胡瓜を浸してあるいつもの河口へ戻った。
乾いた流木と、何日分かの新聞紙を山にして、小さな釜戸を造る。その上に金網を乗っける。これも持参のマッチで火を点け、その上に捕ってきた牡蠣や鮑鰒を置いた。
火の上で、まずは乾き始めたそれらを見守りながら、いさなは冷たい麦茶を一口飲んだ。母親に今日の昼は戻らないと言うと、握り飯と麦茶を用意してくれたのだ。いさなが海へ行くということは知っているはずなのに。一人だろうということも予想しているはずなのに。
もう一口、冷たい麦茶を飲み込んで、いさなはホッと息を吐いた。
余った新聞紙を下にして、熱砂の否応無い侵略から身を守りながら、いさなはじゅうじゅういってきた獲物の隣で握り飯にかぶりついた。
一応梅干が入っていたが飯粒は妙に熱くなっていて怪しいな、といさなは思った。けれどこの程度で腹を壊すほど柔な胃袋は持ち合わせていないのである。
大きな握り飯を完食して、最後に指についた飯粒を舐めとりながら、いさなは傍らの網を横目で見た。
その上ではまだ獲物がゴロゴロとしている。一人では食べきれるかどうか知れない量に思えた。
少しの間、多すぎる獲物を無言で見守ったいさなは、突如フイッと網から視線を外し、少し乱暴に胡瓜を鷲掴んだ。
胡瓜のさきっちょの、黄色い花の残りかすが付いている硬くてまずい部分を吐き出してから、みずみずしい緑を噛み締めた。あまり味はしない。
（そうたがいたらいいのに）
いさなはむちゃくちゃに胡瓜を噛み砕きながら、鼻で荒い息をした。
（そうたがいたら、この貝も余らないし、浜辺にも友達が溢れていた。一人で金網やら新聞紙やらを持って来る必要もなかったのに）
噛み砕きすぎて離乳食みたいにどろどろになった胡瓜を飲み込み、いさなは今度こそ
「……」
口で大きな深呼吸をする。
吸い込まれた熱い空気が、少年の体を駆け巡った。
肺の中がヒリヒリする。
熱い空気のせいで、喉元から肺にかけてが痛むのだ。
何気なく眺めていた海の、その沖合に一つの小さな点があった。
ごみだろうかと思ったそれは、どうやら一羽のカモメらしい。
いつもは空中をスィーっと横切って行くそれが、波に上下しながらどこかへ向かって水を掻いている姿は、不思議な気もおかしい気も
「――」
した。
いさなが見守っている中で、カモメはキリリと目尻を上げ、沖へ沖へと姿を滲ませていく。
もちろんここからは見えないが、何もかも悟りきったようなカモメの顔は想像に難くない。

そのくせ奴と来たら、水中では無我夢中でもがいているのだ。力強い気もしたが、痛々しい、と思う。
「――ねぇ」
なんだかそうたも、あんな風にすました顔で波に向かいながら必死に水平線を目指したのではなかろうか、とふと思えた。
振り返りもせずただひたすらに――。
今も目指しているのかもしれない。暗い水を押し分けて、ここからは見えない暗い、深い深いところで手足をばたつかせて……
いや、違うな。そこまで夢想して、いさなは苦く笑った。
そうたは水の中で手足をばたつかせたりしない。ゆったりと水を掻くのだ。
まるで水流に乗ったように、滑るように水の中を進むのがそうたの泳ぎかただ。
それなら……あのカモメは誰だろう。がむしゃらにもがきながら、必死に水平線を目指すのは――？
見るに耐えなくて、沖のカモメから視線を外したいさなは、自分の膝に顔を埋めた。
そうたは何処だろう？そうたは、何処にいるのだろう？
潮の匂いのする自分の膝に、そっと唇を寄せたときだった。
突然、冷たい手がいさなの肩を掴んだ。
今水からあがってきたようにひんやりと凍えたそれに、いさなは飛び退る。
とっさに、村に流れていると言う噂が、子供を引いて行くという幽霊の話が頭をよぎって、いさなはギュウッと両目を瞑った。

「ねぇ、焦げてるよ」
「……へ？」
幽霊にしては妙に間の抜けた声に、いさなは目を開けた。
後ろを振り返ると、目の前に白い足があった。
「焦げてるってば。いいの？」
呆然としていたいさなは、そこでようやく焼いていた貝のことを思い出したのだった。
慌てて釜戸を見ると、確かに黒煙が上がっている。
いさなは突然現れた彼の顔も見ないうちに炭化しかけているそれらの始末をしなくてはならなかった。

焼いていた獲物を諦め、残りの５つを炙りながら、いさなは隣に座り込んだ少年を見守る。
彼は――「はやせ」は微かな笑みを浮かべて静かに座っていた。
妙な少年だった。

やっと黒い煙が収まったころ、いさなは初めて顔を上げて彼を見た。
そして「あっ」と思った。
本当に幽霊か物の怪かと思ったのだ。

何故かというとつまり、彼の姿があまりに妙だったからだ。
目の錯覚かとも思った。それほどに、目の前に立つ少年は異常な姿だった。
彼の姿がどんなかといえば、その髪色は何度目を擦ったところで白銀。目も、兎よりは幾分ましかと思われる赤茶。
意識せずとも、体が一歩後方へ動いた。まるで人間じゃない。
いさなの怪しむような視線に気付いて、少年は少し苦々しく笑った。
「髪も目も、生まれつきなんだ」
「生まれつき？」
「そう。シキソっていうのがね、薄いんだって」
奇妙な少年は肩をすくめて見せた。半袖から剥き出された細い腕も、冷たい色をしている。
「――どうして、ここに」
それが恐ろしく不当な質問であることには気付いていたが、いさなはついそう言ってしまった。
この海もこの浜も私有地ではないので、当然誰が来たっていいのだ。けれど、彼がここにいるのはなんだかそぐわない。
何にというに、世界自体に。
いさなの質問に、奇妙な少年は首を傾げた。
「どうしてって、ここは入ってはいけない場所ではないだろう？それともいけないのかな。ごめん。今日この村に来たばかりだから……」
最後の言葉にいさなは、この白い少年が引っ越してきたことを知る。
当然といえば当然かもしれない。水難事故があったばかりだし、大して広くもない砂浜だ。
いつの年でも海水浴客なんて来たことがないのだ。近くには旅館、民宿の類すらない。
今年この砂浜へ来る子供といえば、いさなの他には他所から来た新参者くらいなものだろう。
彼の容姿以外に何か引っ掛かっていたものが解けて、いさなはやっと緊張の糸をほぐしたのだった。
そうしてみると彼の奇妙な髪や目も大して気にならない。

「引っ越してきたのか？」
ここは入ってはいけない場所だと勘違いしたのか、退き返し始めた彼を捕まえ、いさなは火の傍へ座らせた。黒い炭になった木を掻き混ぜると、パチンと火の子が飛び散る。
「……うん。はやせっていうんだ。よろしく」
ペコリと頭を下げる少年の礼儀正しさにつられて、いさなもペコリ。頭を下げた。

そろそろ焼けただろうと、いさなは水で濡れた軍手を使って次々と貝を取り上げていく。
砂の上に敷いた新聞紙の上で暫く冷まさなくてはいけない。
貝がこげていたのを教えてくれた礼と歓迎の意も込めて、いさなははやせにご馳走することにした。
こんな風にして貝を食べたことはないのだろう。はやせは興味深そうにジュウジュウいっている貝を見つめている。

「何処に越してきたんだ？」
はやせと違ってそんなものに興味のないいさなは、二つ目の握り飯に齧り付きながら尋ねた。
麦茶は分けてやったがこの怪しい握り飯はやらないほうがいいだろう。
幸いはやせは昼食は食べてきたらしく麦茶だけでいいと言ってくれた。
「あそこだよ。向こうの岩場の、更に向こうにある岬の上」
はやせが指差したそこは、先程いさなが漁をした岩場の奥にある岬だった。
その岬の中ほどに、少し大きめのここいらでは珍しい洋風の家が建っている。
「あそこか？幽霊屋敷じゃん！」
その家は何年も使われてないらしく荒れ放題に荒れていたので、地元の子供たちの間では「岬のお化け屋敷」として呼び親しまれていた。
お盆のころには毎年恒例の肝試し大会が密かに開催されるのだ。
「幽霊屋敷なんかじゃないよ。ちゃんと修理して住めるようにもしたんだから」
「あそこ、お前ん家だったのか？」
もしそうなら、なんだかよくないことを沢山したような気がして、いさなは少し後ろめたさを感じたのである。
が、しかし、幸いにも元々彼の家の所有物ではなかったらしく、少し胸を撫で下ろした。
ど ちらにしても今は彼の家となっている家屋の荒廃を手助けしたことにかわりはなく、そして、はやせの家ではなかったとしても他の誰かの所有していただろう家 に勝手に侵入していたという事実は後ろ暗いものであるのだが、いさな達がその家に忍び込んだ時点で、その家は誰か全く知らない人の物であったのだという事 実が、いさなに安堵の息を吐かせたのだった。
そろそろ手に直にもてる程牡蠣がさめてきたので、いさなはそのうちの一つをはやせに手渡した。
彼は暫くの間、その貝の、まるで貝ともおまわれない複雑な造形を楽しんでから、いさなの見よう見真似で身を抉った。
「……おいし」
そうだろうという目で頷いて、いさなはもう一つ勧める。結局数分後に五つの貝はすっかりなくなってしまった。
身を剥がされた貝の殻と、真っ黒く燃え尽きた流木やら灰やらをごちゃりとまとめ、掘った穴にそれらを落としてからいさなは改めてはやせを見る。
銀 色の髪、血色の目。しかしそれらは、もう何の違和感もなくはやせという器の中に溶け込んでいた。親しくなれそうな予感がする。独り海に通ういさな。越して きたばかりで独りきりのはやせ。そんな二人が出会って、親しくならない方法なんてあるのだろうか。それに付け加えて——いや、それこそが大きな理由かもし れないが——いさなははやせに対して妙なくらいの親近感を抱いていたのだ。彼も自分も独りきりだという点に於いてではなく、彼の、はやせの、透き通るよう な白い肌に親しみを抱いた。

血管が見えそうなくらいの白磁の肌は、いかにもそうたに似ている。

ごみを完全に埋め終えてから、いさなははやせを振り返った。そういえば未だ名前を言ってない。
「俺はいさなだ」
瞬間流れる奇妙な間。きょとんと見つめるはやせの瞳は、訳が分からないと言っている。
「名前だよ。いさなっていうんだ。宜しくな」
「……あぁ。いさな、ね」
まだすっとぼけたような顔をしていたはやせは何度か瞬きをして、そして突然腹を抱えて笑い出した。
笑い声と共に小刻みに震えるはやせの髪が、天頂を少し過ぎた太陽を浴びてキラキラ輝いていた。
「な、何だよ！どうせ俺の名前は変な名前だけどなぁ」
ケラケラと笑い転げているはやせは、目に一杯の涙を溜めながら「そうじゃないそうじゃない」と、手と首を振って見せた。
「だって、名前を聞いていないなんて思わなかった」
苦しそうに蹲るはやせを見下ろしながら、いさなもついには吹き出してしまった。
何がそれほどにおかしかったのか、今となってはわからないが、とにかくおかしくておかしくて仕方がなかったのだ。
大部暫くの間笑い転げていたので、落ち着き始めたころには日の光に焼かれて肌がぴりぴりと痛みを訴えていた。
頭は更に熱を吸ってグラグラとする。
「はやせ、お前泳げる？」
笑い疲れてゼーゼーいっていたはやせは、突然むっとしたような顔で立ち上がると、身につけていた縹色のシャツを一気に脱ぎ捨てた。
「失礼だな、僕は一応泳ぎに来たんだからな」
下に穿いていた海パン一丁になって、見ていろと言わんばかりに勢いよく海へ駆け込んだ。
　飛沫をあげて海に飛び込んだはやせは、少しだけ深い辺りまで行ってから一度水面下へ潜り込んだ。三〇秒、一分、一分と三〇秒……
「はやせ！」
そのあまりの潜水時間に異常を感じたいさなは、慌てて自分も水の中に駆け込んだ。
しかし、この広い海でどうやって彼を探せと言うのだろう。
見回しただけでもそうとうな面積がある。とにかくいさなは、彼が初め潜った辺りに身を沈めてみた。
何もない。
顔を出して叫ぶ。同時に周りを見回す。
はやせの姿も、海鳥の一羽さえ見当たらない。
いさなは、もう一度潜ってみようと大きく息を吸った——その瞬間だ。
急に足をグイッと引っ張られ、いさなは水中深く引き擦り込まれた。

おそらくは人の手。氷のように冷たい人の手が、少年の足首をしっかりと掴まえている。
あまりに突然のことで、いさなは水中で悲鳴をあげた。
ゴボリ。口から吐き出された空気の塊が遠い水天井目指して上がっていく。
反対にいさなを掴んだ手は、深く深く彼を捕らえようとする。
少年は、何とか逃れようと手足をばたつかせた。必死にもがいた。
すると、意外にもその呪縛は簡単に解かれたのである。
いさなの体が海面へ向けて上昇する。
プッハァ、と勢いよく、半ば勢い余って海上へ顔を出すと、後ろから甲高い笑い声が聞こえた。
「はやせ！」
息を乱して振り返ったいさなの、その剣幕から逃げるようにはやせは再び水中へ潜り、いさなから逃げ出した。
しかしその真白な肢体は、水の中で更に白く青褪めて、まるで淡く燐光さえ放っている。
そうとう深く沈まない限り見失うことはない。いさなはにやりと笑って彼を追いかけた。

いさなは村の中で一、二を争うほど泳ぎが上手い。
……そのはずだった。しかし、いくら泳いでもはやせに追いつくことは出来なかった。
二人の距離は一向に縮まらない。その代わり開きもしない。
しかしいさなには、二人の実力が互角であるとは思われなかった。なんだか、そう思われた。

やっと止まってくれた彼に追いついて、いさなは荒い呼吸を繰り返した。
浮かんでいるのがやっと、という状態だ。
ところが、一方のはやせはけろっとしたもので、満足そうに微笑んでいる。
「……お前、見かけと違うのなぁ」
ゆっくりとはやせは砂浜へ向かう。いさなのために。
「だって侮られたくはないからね。いさなは僕のこと、もやしっ子だと思っていただろう？」
答える変わりに顔の半分までを水中に隠して、いさなははやせの後ろ姿を追った。
水に濡れて眩い光を放つ銀髪が、滑るように岸へ向かって行く。

夜、部屋の畳の上で寝転がりながら、いさなはじっと指先に摘んだビー玉を見つめる。
吊り下げられた電球の光がビー玉の中で複雑に屈折し、いさなの顔の上に変な斑模様を作っていた。
「……そうた」
彼の白い顔とはやせのそれとが重なる。顔が似ているわけではない。
声も似ていない。
性格だって、そうたの方がもっと大人しかった。
それなのに、そうたとはやせ、二人はぴったりと重なってしまう。
イメージが同じなのだ。
白くて、冷たくて、まるでこのビー玉のように透き通ったイメージ。

「……幽霊」
村中に広まっている幽霊の噂。
いさなは、はやせこそが幽霊かもしれないというとりとめもない考えをめぐらせながら、意識を岬の方へ向けてみた。
いつもは気にとめることが殆どない波の音が静かに響いている。
いさなは手の平に戻したビー玉を転がしながら、どんどん考えを奔放にしていった。
そうだ。彼こそ幽霊なのだ。死んだそうたの幽霊。白い影。
自分を海に引き擦り込むために現れたのだ。
現に今日、いさなははやせにその足を引かれたではないか。

くだらない。と、いさなは腹筋の力だけで起き上がった。
ビー玉を机の引出しにしまいこみながら、しかしもしかしたら——と、一瞬手を止める。
もしかしたらそういうこともあるのかもしれない。
第一にタイミングがよすぎるではないか。もしかしたら本当にそうたの白影かも知れない。
そしてそれならば、いさなは引出しをパタンと閉める。
それならば、早く自分を海へと引き込んでしまえばいい。
いさなは黙々と布団をとりだした。そうたのいない世界は何と味気ないのだろう。
そう、何度思ったか。
そして、今も考える。
何と味気ないのだろう。
日々は打ち寄せ、そして引いていく波のように、多少の変化はあったとしても殆ど何の変わりもない、同じようなもの。その繰り返し。
起もなく伏もない、退屈な毎日。
それならば幽霊に殺されるのも面白いかもしれない。
そうたと同じ、青い海の中に引き擦り込まれる。足を、真白な手に掴まれて沈んでいく。
自分はもがくだろう。必死に上へ向かおうとするだろう。
しかし、絡みつく腕は決して放してはくれない。
ぐいぐいと下へ、暗い海の淵へと自分を誘い込む。
口から空気の塊が溢れだし、逆に塩辛い海水がどんどん入ってくる。
体中一杯になる。
そして——一体となるのだ。自分の体は塩水で飽和され、細胞の隅々まで満たされ、膨張し、はじけ、崩れ落ち、潮の流れに溶け込んでいく。
その目覚しい変化の過程。
今のこの生活とはかけ離れた自分を想像することは、少しぞくぞくする。
恐怖なのか快感なのかは分からないものの、自分の中にそれを望む自分が存在する。
膨れ上がった自分はどんな色だろう。
そうたやはやせのように真白な色をしている気がした。

そして、それこそが自分の望むもの。彼等と一体になるその素晴らしさ。
ぐずぐずと溶けて、彼等と混ざり合うその快感。
それは性的な、しかしそれよりも純粋な欲望だった。
ただ一途に一緒に居たいという欲望。
自分と相手の境界というものは、たとえ表面の皮一枚とて邪魔に感じる。
そんな障害を取り去って細胞レベルで、いやそれよりも「存在」という目に見ることのできない抽象的なレベルで彼等と一体になりたいという渇望だった。
そうたと、そしてその白影であるはやせと同じ存在になる。同じものになる。
自分は彼等であり、彼等は自分である。
そういう、決して離れることのできない存在となるのだ。
いさなはそのあまりの素晴らしさに大いに興奮し、そのせいで速くなった呼吸を自分の枕に吸わせた。
めくるめく快感。そして最高の陶酔だった。

洞窟

翌日もやはり快晴。最近はめったに雨が降らない。
海の果てとも感じられる方向に見える入道雲は、横に滑ってばかりでちっともこちらにはやってこないのだ。
この日も、膨大な水を含んだその雲は、遠い所でただモクモクとしていた。
同じように家を出て、同じ道を通り、同じ坂を登り、そして下る。
いつもと変わらぬ砂浜に転がったいさなは、自分に向けられているらしい笑い声目指して視線を強く注いだ。
――眩しい。どうにもこの眩しさは髪だけでなく体全体から発せられているのではないかと思われる。

「派手にこけたなぁ。一回転してた」
バツが悪そうに目をあちらの方に向けながら、それでも反撃する口をいさなは持ち合わせている。
「いつもは着地できるんだ！今日ははやせがいたからぶつかると思ってハンドルを傾けたんだ！」
頭からかぶってしまった砂を払い落としながら、いさなはぶっきらぼうな言い訳をする。本当を言うと、浜にいたはやせに動揺したのだ。
昨夜の奇妙な考えが頭を掠め、体が萎縮してしまったのだ。
昨日の晩はあれほどに死を、いや融合を夢見たのに――。
「ねぇ、いさな」
大分派手で複雑な音を立てた自転車を点検していると、背後にいたはやせが、波が立てた泡のように涼やかな声で呼びかけて来た。
彼はいさなが来る前から泳いでいたらしく、少し息を弾ませている。
もっとも先程の爆笑のせいもあるのだが。
とにかくいさなは、集中していた視線を外して彼へ振り向いた。
「僕、洞窟を見つけたんだ」
「洞窟？」
うん。と、少し上気した風な顔で頷いたはやせは、先に立って歩き出す。
まだ行くとも何とも言っていないのだが。

少し前を行く少年は、件の岩場の方へ向かっていた。
そうたが消えた岩場だ。
途中、岩の障壁によって削がれた波の勢いを身に含み、不気味に沸いている。
表面よりも底の方に複雑なうねりを持っている。
目を細めれば、透明な水面を透して、恨みにも似たその逆巻が見えるようだ。
（あそこに……そうたがいる）

あの暗澹たるよどみの、どこか底の方にそうたの白い肢体が光を放っているはずだ。
やはりいさなは憧れているのだと思う。
彼と並ぶ自分を想うと、それだけで体の隅々まで快感で満たされるのだ。
それならどうして先程は竦んだのだろう？
いさなは深い海の底と前を行くはやせを見比べて首を捻った。
「……どうしたんだい？呆けてるよ」
少し歩みの遅れ始めたいさなを振り返って、はやせは心配気な顔をした。
それでようやく正気を取り戻したいさなは、少し曖昧に頷いて遅れた距離を小走りで縮めたのだった。

一体何を考えているんだ。目の前にきちんと実体として存在している彼が幽霊であろうはずがない。
大体にして、幽霊自体、その実在も怪しいではないか。

はやせは、砂浜に突如立ち上がった大岩の下でその歩行を終わらせた。
そうだろうとは思っていたがやっぱりここか。と、いさなは息を吐く。
この、山ともいえるほどに大きな岩を境とした北側には、巨大な岩がごろごろ、にょきにょきしている。
それも、ある程度の感覚を置くのではなく、まるでどこか一ヵ所を争って寄ってきたのではないかというように密集しているので、岩が集まっているというよりは凹凸の激しい岩壁、という感じだ。
「ほら、ここさ。今朝いさなが来る前に見つけたんだ」
大岩の足元に、虚ろに空いている暗がりを示して、彼は得意そうに口端を上げた。
今更知っているとも言えないし、自慢気な彼を消沈させたくもなかったので、いさなは黙してその後に続き、洞穴の中に踏み込んだ。

ほんの二、三分薄暗がりの中を歩くと、小さな水の溜まりに出くわす。
学校のプールの半分もない。六畳ほどの大きさの水溜りだ。
そして、ここで道行は終わる。海へ通うようになって初めて見つけるこの場所は、全ての男子を一度は魅了し、そしてすぐに失望させるところだった。
今年この海へやってきたはやせも、まんまと罠にはまってしまったのだ。
洞穴、暗がり、冒険――。そんな言葉に騙されてここに入り込み、結局は魚さえいないただの湿った帰結点を見つけて呆然とする。
光が入らないので、そこは暗く、よけいに陰気な感じが気分を沈ませるのだった。
「残念だな、はやせ。この穴はここで終わりだ」
いさなは彼の肩を叩いて、来た道を引き返そうと促した。
帰ろう。ここはつまらない。

しかしはやせは、がっかりした表情はちっとも見せずにいさなを振り返った。
「違うよいさな。僕が見つけたのはこの先さ」
「――先？」
「うん。着いて来て」
滑るように海水に飛び込んだはやせは、途惑ういさなに手招きした。
「大丈夫！すぐだから」
水は暗かったが、前を進むはやせの体が白く滲んで見えたので、いさなが迷うことはなかった。もっとも迷うほどの行程もなかったのだ。
水溜りの最奥にある垂直な岩壁に沿って、そのまますとんと三メートルほど潜ると、大きくはないが大人二人が並んで通れるような穴が口を開けていてた。
驚きの気持ちでそこを潜り抜け、白い影を追いかけて水面へ顔を出す。すると――強烈な光がいさなの瞳を貫いた。

「……ここは？」
突然開けたその大きな空間をゆっくり見回しながら、いさなははやせに続いて岸へあがった。
一体どれほどの年月であろうか、波の力によって大きく抉られた岩は、いい具合の岸辺となっている。
しかも、まともに岩の威力を喰らうわけではないためか、その岩の特質なのか、優しく削られた岩肌は何等刺々しくなく、むしろ滑らかだ。
「……こんな所があったなんて」
誇らしげな顔をしているはやせは、どうだい？と言って巨大な洞窟をぐるりと見渡した。
先程の、風呂二・三個分の小さな水溜りとは違って、水道を抜け出したこの場所は学校のプール半分ほどの広さがあった。ひしめき合う岩山の間にできた不思議な空間だ。

四方はもちろん岩に囲まれている。
特に大きいものが四つ、洞窟の壁面の大部分を構成している。
互いに押し合いへし合いしながら上へ上へと向かい、そのうちに一番てっぺんのところで複雑に噛み合って、その口を閉じていた。
互いに互いを支え合ってできたその天蓋には、四つの岩の重なり方によって、幾つもの小さな隙間がまばらにできている。
その隙間を通って差し込む光は空洞の中を神秘的に照らしていた。
細い糸が天井から幾本も下り、スポットライトのように至る所を照らしている。
そのライトが透かした海面は、緑に近いエメラルドグリン。
何かの本に載っていた、鍾乳洞にある池のような色をしている。
透明度は抜群で、光の矢が射しているところはかなり深くまで覗けた。

「すごい」
呆けているいさなをそのままにして、はやせは一人、丁度出入口とは真向かいにある、ニョキリ

と飛び出した一つの岩の方へと走って行った。
その岩は、先端だけが心なしか前の方へ張り出していて、飛び込み台にはもってこいの形をしている。
「いさなっ！」
ボウッと洞穴の中を見回していた友人の注意を喚起するため、はやせは一言彼の名を呼ぶと、その飛び出した岩の上から身を躍らせた。
はやせの白く輝く肢体が宙に舞う。
天蓋から漏れてくる光が彼の髪を照らし、身体を照らして眩しいくらいだ。
あまりの眩さに目を細めながら、いさなは彼の姿を追った。
白い影が描く軌跡は本当に美しい弧を描いている。
そして――トプン。
音が響きやすい洞窟の中だというのに、小石を投げ込んだような微細な音しかたてず、はやせは水の中に頭から吸い込まれて行った。
そして――浮いてこない。
初めて会った日のように浮いてこない。
どうせまた潜っているのだろうとわかってはいるのにいさなは不安になった。

「はやせ？」
口に出したその名前は辺りの岩壁に何度もぶつかり、複雑に響きあっていく。
幾重にも重なった木霊の音に包まれながらも、いさなは妙なくらいの孤独を感じないではいられなかった。
はやせは浮いてこない。
「……はやせ？はやせ！」
こんなに限られた空間で、彼のあの白い身体を見失うなんてことがあるだろうか？
ここへ来る時の、あの暗い水の中でもしっかりと見て取れたものを。
しかし、一向に彼の姿は見えないのだ。
いさなの中で、はやせとそうたが重なっていく。
いなくなったそうた。
いなくなったはやせ。
自分を置いてどこかへ行ってしまった。海へ消えてしまった。
二人の姿が、どんどん重なっていく。
どんどん、どんどん重なって、しまいには一つの白い影となり、強く輝き出す。
「はやせ……？そうた！何処へ行ったんだよ！」
ザブザブと水を掻き分けながら泳ぎ回るのだが見つけることができない。
とうとういさなの瞳には涙が滲んだ。

ドブン

足を引かれたのはその時だった。
冷たい手がいさなを海中へと引き込んだ。
海の水よりもずっと冷たいその手は、しっかりといさなの足を掴んで放そうとしない。
必死でもがくのだが、水を蹴っているようでまるで手ごたえがない。
ただただ下へと引きずられるのだ。

そして暫く後、いさなはフイと抵抗を諦めた。
昨夜感じたあの虚無感が再びいさなを抱きすくめたのだった。
このまま、このままずっと奥深くに沈んでしまえば、一人になることはない。
しかしいさなが抵抗しなくなると、冷たい手は途端に彼を解放したのだ。
全くの無抵抗で、力を抜ききっていたいさなの体は、フウワリと水面へ向けて浮上した。
現金なもので、助かるかもしれないと思った瞬間にいさなの体は生命への執着を再び燃やし始めた。
頭上に揺らめく頼り気のない光へ向かいがむしゃらに手足をばたつかせ、水上へ顔を出した途端、肺一杯の酸素を求めて狂ったように呼吸を始めるのだ。
それは一種の浅ましさのように感じられた。
岸に這い上がり飲み込んだ水を吐き出していると、ケラケラと言う笑い声がした。
言わずとしれたはやせである。
いさなを引き擦り込んだ冷たい手も彼だったのだ。
「はやせ」
「おかしいな。いさなはすぐにうろたえるんだから。水の中からでも良く分かったよ」
言いながら岸へ這い上がってきたはやせの首に、いさなはしっかりとしがみ付いた。
体中が震えていた。
引き擦り込まれた恐怖にでも、まして海の水の冷たさにでもない。
はやせを失うことが恐ろしかったのだ。
はやせを失うことはそうたを失うことと酷似していたから。
彼を二度も失うようなことは耐えられない。

「いさな？」
突然しがみ付かれたことと、友人の震えに途惑って、はやせはただ立ちつくしていた。
まさか彼がそれ程に自分のことを心配していたとも思われないし、引き込まれたことがそれほど恐怖だったとも思えないのに、いさなのこの怯えようは何なのだろう？
「ごめんよいさな。そんなに驚かすつもりはなかったんだ。ただちょっと悪戯しただけだよ。ねえ？」
何度か肩を叩かれて、いさなはようやく大きな深呼吸をした。

「……また、いなくなったのかと思ったんだ」

「うん？」
隣に腰を下ろしたはやせは、足だけチャポチャポいわせながら、何とはなしに耳を傾けている。
「友達が、また海に飲み込まれたと思ったんだ」
いさなの真剣な様子に、はやせはチャポチャポいわせるのを中断して友人を振り返った。
当のいさなは何かに躊躇するようにじっと海面を見つめている。
そこは、相変わらずしずかに揺れているだけであった。
嵐の時なんて、あんなに怒り狂っている海なのに、こう静かでいるとまるで魂が抜けた屍のようだ。
大分暫く、波の微かな上下を見つめてから、いさなはようやく意を決して喋りだした。

彼がものすごい勢いで話を進めるのを聞きながら、はやせはその胸を痛めずにはいられない。
まるで何かに追い立てられるように。そのものから必死で逃げるかのように、いさなは話をまくしたてる。
極力平気を装いながらも、視線を移せばその手は微かに震えを帯びているではないか。
彼の話からではなく、彼の同様ぶりから『そうた』なる人物がいかに大きな位置をいさなの中に占めているのかが窺えた。
そして、そんな親友を失った彼を本当に憐れだと思った。
大切なものを失って、心に大きな穴を開けてしまったいさなが痛々しく思えてしかたなかった。
が、しかし、その反面何かモヤモヤしたものを抱いてもいた。
いさなにではなく『そうた』にだ。
嫉妬だろうか。いさなにそこまで想われているそうたを妬んでいるのだろうか。
しかし、はやせにはどうもしっくりこないのだ。
悋気とは違う。何かもっと、胸の内がどす黒い雲に覆われていくような感情だった。

「ねえ、いさな……」
そうたの話もすっかり終わってしまって、重く流れた沈黙をはやせが打ち破った。
その声はいさなを元気付けるためか嬉々として弾んでいる。
「花火をしようよ。十六日の夜にさ」
「十六日？」
「うん。毎年十三日には墓参りに行くだろう？」
確かに去年もそのころに墓参りに行ったかな？と、いさなは記憶の糸を手繰った。
そういうことには無関心なので忘れていたけれど、たしか八月の十二、三日に家族で墓参りに行った。妹が浴衣を着て提灯をぶら提げていたような気がする。
「盂蘭盆って言うんだって。母さんに聞いたんだ」
「ウラボン？」
「うん」
こっくりと、はやせは大きく首を縦に振った。
「お盆にはご先祖様の霊が帰って来るんだってさ。それで、十六日には火を焚いて、その霊をま

た送り返してやるらしいんだ。だから、僕らもそうたを送ってやろうよ」
「……花火でか？」
いさなは送り日なんて知らないけど、何かもっと厳かな焚き火なのではないかと思うのだが。
「だってやり方まで知らないもの。どうせなら派手に送ってやろうよ」
花火か――。いさなは押入れの中にあるそれを思い出した。
「……いいな、それ」
やっと目を輝かせてくれたいさなを見て、はやせは安心したように笑った。
その笑顔もやはりそうたに似ている。

「……はやせって、そうたと似てるよ」
いさなは思い切って言ってみた。
いさなの中では、もう殆どはやせとそうたは一致していたので、一体彼がどんな反応をするのか見てみたかったのだ。
しかし、当のはやせはいさなの期待に反してきょとんとしている。
「聞こえたか？はやせはそうたと似てるって言ったんだ」
もう一度念を押しても、はやせはただパチクリとしただけで、いさなが期待していた動揺は微塵も見せてくれなかった。
チェッとなって、いさなが仰向けにひっくり返ると、はやせが赤い瞳で覗き込んできた。
「……僕は、そうたに似てるって？」
「ああ。何となくさ。顔は全然違うんだけど」
「じゃあ何がサ？」
問い詰めるはやせの眉間には心なしか不機嫌そうな皺が寄っている。
「だから……何となくだよ。怒ってんの？」
「別に。でも、会ったこともない子に似てるなんて言われたって大して嬉しくもないね」
それはそうだと納得して、いさなはエイッと反動を付けて起き上がると、例の飛び込み台に駆け登った。
「はやせ！ここはどれくらい深い？」
「さあね。でも君が飛び込んでも頭を打つ心配はまずないよ」
聞くなりいさなは思い切り足元の岩を蹴った。
はやせに負けないくらいきれいな弧を描いて飛び込み、その勢いのままストンと底を目指して突き進んだが、なるほど、相当な深さで、底に手が届くということはまず無さそうだった。
仕方なく底を極めることは諦めて、いさなは暫く、その新しい縄張りを点検して回った。
これといって危険そうな岩もなく、四方の岩壁には、天井から降り注ぐ光を頼りに海藻や、何処から入ってきたのだろうイソギンチャクだの貝類だのが、まるで穏やかに微笑みながら群生していた。
四方の壁に沿ってぐるりと泳いでいると、一番最後に出会った壁、つまりはやせのいる岸辺とは丁度真向かいの壁のところだけひんやりとした流れがあることにいさなは気が付いた。
単に光が当たっていないというだけではない。下から冷たい潮流が沸きあがってくるのだ。

「ここが入り口だ」
にやりと一度笑ってから、いさなは勢いをつけて今浮かんでいた場所の真下へと沈む。
水面からどんどん遠ざかる代わりに、その冷水の源泉へ近付いていくのが感じられた。
いさなが潜れる限界点の三分の二程の水深であろうか。そこに大きな穴が大口を開けていた。
暗い暗いその穴は、畳で言えば四畳、いやそれ以上あるだろうか、とにかくとても大きなことにかわりはない。ましてやそれは、ほぼ完璧な円を描いており、人が大口を開けた様子を彷彿とさせた。
そしてその暗さ。
円の縁は見分けることができるものの、それより置くは全くおぼつかないのだ。
一体何処に通じているのか予想すらできず、これが地球の裏側へ、宇宙へ、更には異世界へ続いているのだとしても奇妙さはないだろうと思われた。
それだけ、穴は深く、暗く、底知れない雰囲気を発していて、中に入れば二度と出てこれないだろうと、いさなは直感的に思った。

穴に見とれていたいさなの背を、不意にぞくりとするものが撫であげた。
何が触れたわけではない。いさな自身の恐怖が突如体を駆け巡った冷たさに、彼は慌てて海面へ浮き上がる。
飛沫をあげて顔を出した途端、細い光の光線が、まともに目を射した。
「は、はやせ！穴がある」
丁度飛び込み台から身を投げた彼は、スイッと近寄ってくると「知ってるよ」と頷き、それを確認するように少しだけ潜ってみせた。
「当然だろ？何処から水が入って来るんだよ」
「それは、そうだけど――」
恐ろしい、だなんて絶対に言えなかった。こんなにも相手が平気な顔をしているのだ。言える筈がない。
仕方なくいさなは、それ以上何も言わずにもう一度飛び込み台へ駆け登った。

いさなはビー玉を高く掲げる。
ゆっくり右へ移動させると、電球の光と重なって硝子玉の中にある青い炎が火の粉をあげた。
（はやせは、そうたではないのだろうか）
今日の彼の態度からして、はやせとそうたは別人のようである。
しかし、いさなはまだすっきりとしないでいた。
どうしてもはやせとそうたが重なってしまう。はやせの持っている温かさがあまりにもそうたと酷似していて、二人を同一と見なさないではいられない。
「あぁぁ！綺麗なビー玉ぁ！」
部屋に入ってきた妹のしづが、嬉しそうな悲鳴を挙げていさなから青い球体をひったくった。
「大きいなぁ。きれいだなぁ」

うっとりと、掌に乗せたそれをしづは眺めるのだった。
彼女の手の平にあると、それは常よりも大きく見える。
ビー玉というよりは小さ目の水晶球と言っても良かった。
「返せよしづ！」
無理矢理妹の手からビー玉をもぎ取ったいさなは、それを引出しの奥深くへとしまい込んだ。

その翌日、いさなは例のビー玉を洞穴の中に持ち込んだ。
あのまま家に置いておけば、当然妹の玩具にされるだろうと分かっていたからだ。
「ビー玉？……女の子みたいだ！」
こちらも当然はやせに笑われはしたが、しづの玩具になるよりはましだった。
岩の窪みへ、青く輝く硝子球を置くと、まるで宝石のような光を放つ。
「秘密基地の宝だな」
「海の底から俺たちが探し出したんだ」
「名前は、青い心臓。こいつが海の中にあると、海神が目を覚まして嵐になるんだ」
「沢山の海賊がこの宝石を狙っていて――」
「ここは僕らの最後の砦だ！」
獣のような咆哮が穴の中に響き渡った。
次々に敵の海賊団がやってくる。
金に目のない荒くれ者の彼等は、光り輝く至極の宝石『青い心臓』を狙っているのだ。
大きく反り返った剣や。鋭いダガーを振りかざして襲い来る。
味方の軍勢はすでに絶えて無く、手に持つものは短剣一本。しかし、
それでも大男たちを掻い潜って二人は何とか宝を守り通すのだった。

翌日も、そしてその次の日も、二人は洞窟で遊んだ。
そこが誰も知らない秘密基地だというだけで満足だった。
実際いさなは何をするでもなし、洞窟内の陽だまりの中にあって、ボオッとはやせと並んでいるというだけで満ち足りていたのだ。
隣から伝わってくる、懐かしく優しい空気が嬉しかった。
はやせはそうたと違うかもしれない。
しかし、目を閉じているだけなら彼は全くそうただった。
勝手に思うだけならいいだろう。
一人勝手に、そうたの夢に酔うだけなら構わないだろう。
いさなは安らいだ微笑を浮かべ、浅い眠りに落ちた。

そうた

「いさな！あなたまだ海に行ってるの？」
暫く大人しかった母親が、その辛口を開いたのは更に翌日の夕刻だった。
父は集落の飲み会でいなく、彼女はいくらでも小言を言えるというわけだ。
不機嫌そうに料理の皿をドンッと置いた母親は、いさなの顔を両手で挟みこむと、自分そっくりな目を覗き込んだ。
「母さんだって、怒りたくて怒ってるんじゃないのよ。友達と一緒に行くっていうのなら何も言わないわ。だけど、あなた一人で行ってるでしょう」
いさなは咄嗟にはやせのことを口にしかけたが、何故かは分からない、彼のことを言うのは躊躇われた。
言ってはいけない気がしたのだ。
言ってしまったら、はやせはいなくなってしまうのではないかと思われた。
「大丈夫だよ。幽霊なんて出るはずないだろう？」
覗き込まれるのが嫌で、無理矢理母の手から逃れたいさなは、父親の席にドカリと腰を下ろした。
父がいないときだけは、食卓のてっぺんに当たる家長の座に腰を下ろしてもいいことになっている。
「いさな！母さんはねえ、幽霊なんて信じていないの！そんなんじゃなくて——あなた最近友達とも遊ばないし、いっつも一人だから、草太くんみたいにいなくなっちゃうんじゃないかって……心配なのよ」
彼女の、本当に心細そうな瞳が、逆にいさなの心を嵐のように波立たせる。
同情はいらない。憐れみなんて必要ない。欲しいのは愛情なんかじゃない。
ガツガツと、食べ物にあたるようにして夕食を片付けると、いさなは部屋に引き篭った。
静寂。これだ。静けさの中に含まれる安心感。自分が溶けていく感じ。

虫の音なのか、それとも夜の闇自身が備えているものなのか、かすかな耳鳴りのような音が暗い空気を満たしている。
ソロリ、とガラス窓を開けたいさなは、誰にも見つからないように注意しながら庭の土の上に足を下ろした。
一年中湿っているその土は、裸の足に気持ち良い。
あまりに土の感触が心地よいので、用意したサンダルは片手にぶら提げたまま、いさなは海までの道を歩いた。

童話のトム・ソーヤーに憧れて、いさなとそうたはこうやって真夜中に家をこっそりと出ることがよくあった。
互いを呼び出す合図も決まっていた。
絶対不信に思われないようにと特訓して身につけた、本物そっくりの猫の声。

そうたの家の前でいさなは三回鳴いてみる。当然出てくる様子はない。

真夜中の海は、星の輝きが無い分夜空よりも暗く沈んでいる。
砂浜に寝転んだいさなは、波の音をからだ一杯に感じながら目を閉じた。
穏やかな波が近付く音。
浜へ打ち上げるときのダプンと砂を叩く音。
そして静かに引いていく、それらの音の規則性は、何か大きな生物の鼓動のようにも感じられた。
鼓動、と言っても、今胸に手を当てると感じられるそれではない。
もっと原始の音。母親の胎内で聞いた、その音だ。
目を閉じればより一層そんな雰囲気に包まれる。何からも隔絶され、真っ暗な中にいる自分。

「……いさな？」
うとうとしていたのかもしれない。頭上からかかった声に、当のいさなは飛び上がった。
「は……やせ」
暗闇の中でもはっきり見える程白い彼の顔が真上にあった。
「何してるんだよ。夜中だよ？」
「自分こそ」
体を起こして座り直したいさなは、少し不機嫌そうにはやせを睨んだ。
「僕？散歩だよ。こんな色だから日差しには弱いんだ。散歩するなら夜にしなきゃね」
「？だっていつも平気だろ？」
「あぁ、薬を塗っているから。それに最近はずっと穴の中だし」
ふうん。といさなは納得して、再び意思息を海へ戻した。
「――いさなは？」
「俺は……家に居るのが嫌でさ。母さんがうるさいんだ」
そっか。と頷いたはやせは、それ以上何も言わずいさなの隣に腰を下ろした。
　ゴー
　タプン。
　ザー……
繰り返される海の鼓動。心地よいリズム。心が、落ち着く。
（母さんじゃないな。そうただ）
いさなはふと悟る。母親の鼓動を懐かしんでいるのではないことに。
こんなに懐かしいのは、こんなにも心が鎮まってしまうのは、海自体がそうたのように優しいからだ。
海の音に包まれていると、そうたが抱きしめてくれているようだ。

「――いさな？寝ちゃったの？」

遠いところから声が聞こえる。温かい声。
「……そうた」
しかし目を開けると、目前にいるのは銀髪をしたはやせだった。
こんなに似ているのに。
こんなに優しい声をしていて、瞳を閉じて感じるその雰囲気もそうたそっくりなのに、そこにいるのは、はやせなのだ。
　こんなだから、いさなは未だはやせとそうたを重ねないではいられない。
本当にこの二人が別人だなんて信じられない。

「……この前、光る魚を見たんだ」
普通なら笑うだろう。何を言っているのだと呆れられるだろう。
「光をはね返すっていうんじゃないんだ。本当に光を放ってる魚をここで釣り上げたんだ」
けれどそうたなら、彼だったらきっと嘲笑ったりしない。
きっと頷いてくれる。
少し驚いた顔をしてから、ほのかな笑顔で頷いてくれるはずだ。

暗い夜道を、ひたひたと裸足で歩きながら、いさなは独り月を見上げる。
この間の魚は、丁度あんな風に輝いていたのだった。
砂浜で恐る恐るはやせを振り返ると、彼は月の光の中で優しく笑ってくれた。
その髪は、冷たい月光を反射してキラキラとしている。
どこかの本で見た、天使のようだった。
少なくとも、いさなにはそう見えた。
神様が贈ってくれた御使い。
人を、自分を、救ってくれる存在。

「いさな！また一人で海なのぉ？」
母親のがなり声も今は余裕で受け止められる。
壁に立て掛けてある自転車にいつも通り飛び乗って、いさなは家の中へ怒鳴り返した。
「大丈夫！一人じゃないよ！」
妙に元気の良い息子に、母親は首を傾げた。昨日までの彼とは大違いだ。
「……ねぇ、しづちゃん？お兄ちゃん、誰と一緒に海へ行ったの？」
「しらなぁい」
龍夫君だろうか？哲君だろうか？いずれにしても、村の婦人会で、盆明けまでは子供だけの遊泳は禁止しようと決まったばかりなのに。
「いぃさぁっなくーん！」
表で子供の声がしたので、彼女は洗い物の手を止めて玄関へ向かった。
「あら、和男君。ごめんなさい。今日もあの子、海へ行っちゃったのよ」
虫取り網を持った和男は、眼鏡の奥の小さな目を、残念そうにしょぼしょぼと瞬いた。

毎日交代で迎えに来てくれる彼等のためにも、早くいさなを復帰させたいと思うのだが、無理矢理息子を従わせるのも考えものだと、今は思うのだ。
「――本当にごめんねぇ？」
「いえ、また来ますから」
そう言って、村でも一番小さな和男は、くるりと回れ右をした。
家の前の垣根のところに待っていた四、五人に駆け寄ると、「だめだった」と首を横に振るのが見えた。
「今日もだめかぁ」
西瓜を抱えたたつおが、がっくりと肩を落とす。
彼が、そうたを除いては一番いさなと仲の良い友達だった。
「仕方ないよ。そうたが死んじゃったんだもん」
青鼻を垂らしたやすしは、鼻をすすりながらそうたの家の方角を見た。喪中の札がここからでも見える。
「でもよう、いさなは毎日海なんか行って何してんだよなぁ？」
いさなの喧嘩仲間のかずひろも、少し寂しそうに溜息を吐いた。
「案外あれだよ。幽霊と遊んでんだよう」
「居るわけ無いだろそんなもん」
「うしおんちは年寄りいねえからなあ」
「うしおって呼ぶなってば！」
ワァーッと遠ざかっていく喧騒を、いさなの母は目を細めて見つめた。
あの中に息子が入る日はいつなのだろう。
海よりの家の子は全員いた。龍夫に、哲に、和男、康志、和広と昌明。
それならやはりいさなは一人で海へ行ったに違いない。
フウッと一つ息を吐いて、彼女は再び台所へ向かった。

「いっくぞぉ」
元気の良い叫び声が、洞窟中に反響した。
続いて響くザバンという音と飛び散る水飛沫。
最近ではこの飛び込み台にもずいぶん慣れて、二人は次々と新技を編み出していた。
水中深くに口を開けている大穴も、今はもう怖くない。
「っいさなぁ！そんな大声で叫ぶなってば」
音の振動をまともに食らったはやせは、ガンガンなる頭を振った。
へへッ、と悪がきのように笑って、いさなは岸へ上がった。
「まったく。今日のいさなは元気すぎてたまらない」
昨日までの彼とは別人だ。
夜、あんなにもしんみりしていた彼に会ったものだから、尚更そのギャップが信じられない。
はやせはすっかり呆れ顔でいさなを眺めた。
「いさな、もう昼だよ」

野菜ならまだしも、握り飯をここに持ち込むことはできないので、昼には一旦外に出なくてはいけない。

「いさな？何か良い事があったの？上機嫌だけど」
大きな握り飯にかぶり付いていたいさなは曖昧に頷く。
「――何さ？」
彼がご飯を飲み下したのを確認して、はやせは畳み掛けて聞いた。
「別に、何でもない」
いさなのそっけない態度に少しむくれ顔を作って、はやせは小さなお握りに上品に口を付ける。
こんなところもそうたそっくりだ。
はやせはそうたに違いない。昨夜のことで、いさなは確信した。
はやせはそうたの幽霊だ。
村の噂通りなら、彼はきっと自分を連れて行ってくれる。
一緒に海の底へ行くことができる。いつまでも、一緒にいられる。
それはいさなの死を意味している。
しかし『死』は、いさなを甘く酔わせはするものの、決して恐怖には成り得なかった。
そうたがいない。この辛い今から抜け出せるなら、そして彼と一緒にいられるのなら、いさなにとって『死』は喜ぶべきことなのだった。

「ねえ、あなた」
子どもたちは寝静まっている。遅く帰ってきた夫の夜食に付き合いながら、いさなの母は深刻な顔で彼を見上げた。
「――いさながね？ちょっと変なのよ」
「変？」
「誰とも遊ばないで、あの子一人で海に行っているでしょう？他の子はみんな山に行っているはずなの。えぇ。だって海よりの子が揃って迎えに来てくれるのだもの」
お茶漬けを掻き込んでいた夫は、気の無さそうに夕食の残りのおかずへ箸を伸ばした。
「そのはずなのにねぇ、あの子、昨日も今日も一人じゃないって言い張るのよ」
「……はぁ？」
「だから、海で一人で遊んでるんじゃないって言うの。友達と一緒だって」
少しの間、茄子のから揚げをつついていた彼は、小さな溜息と共に重い口を割った。
「今年はあいつの好きにさせてやろうや。平気な顔してるけど、いさなはいさななりに苦しいんだから」
夫の言葉に、彼の妻は少し物足りなそうに下を向いたが、それ以上言い返してくることはなかった。
彼にそう言われると何も言えないのだ。
先立って、彼も幼い頃に友人を海で亡くしていると聞いた。

だから、今年のいさなのことは、彼に一任した方が良いのだと思っている。
それでなくても、彼女の父母は未だ健在で、亡くなった友人もいない。
彼女は近しい者の死に、未だ実感が沸かないのだ。
兎も角夫に言われたことを守るだけである。

四方を岩で囲まれた穴の中では、水のしぶくザバンという音と、少年の笑い声が木霊している。
それはぐるりの岩壁に跳ね返り跳ね返りして、そこにいるのが二人だけとは思えない騒々しさだ。
一つニョッキリと聳える岩を蹴って、黒くて太い髪を五部刈にした、いかにも健康そうな少年が宙へ身を躍らせた。
水面へ向かって描かれる、美しい孤。
その途中、いさなはくるくると二回、宙返りをした。
そしてザブン。頭から水へ潜る。
ここ数日練習していた技が、とうとう成功したのだ。
外の世界で、高い、それこそ十メートルはある崖の突端から飛び込む時なら、こんなのは技のうちにも入らない。
しかし、たった数メートルしかない岩の上からそれを成功させるのは至難の技だった。
「できた！」
水面に顔を出すなり、いさなは甲高く叫んだ。
「見たか？はやせ。出来てただろう？」
嬉々とした顔で彼は辺りを見回した。
何処かにいるはやせを探して。
はやせはあまり飛び込み台を使わないのだ。
一日中水の中で気持ち良さそうに泳いでいる。
時に岸に上がり体を休ませるものの、それ以外のときはいさなが何かの遊びを持ち掛けない限り日がな一日この天然プールの中で泳いでいた。
それはあまりにも伸び伸びとしていて、むしろ水の中に居る方が彼の自然体ではないかと思えるほどである。

日の光が乏しい洞窟の中では水温が低い。
三十分も泳ぐといさなの体は冷えきってしまう。
仕方なく彼は、温められた岩の上によじ登って体を休ませた。
今日で三回目だ。
相変わらず岩の窪みに置いていたビー玉を手にとって、握り締めながら、いさなはひたすら泳いでいるはやせを眺めた。
彼の泳ぎはしなやかで一切の無駄がない。
飛沫はおろか音も立てずに浮いたり沈んだりしている様子は、幻想的でさえある。
艶かしい、とも言える。

暗い、海の水から、はやせの整った顔が現れる。
その髪は光をはね返してキラキラ輝く。
そして薄い肩、細く、しなやかな腕が後ろへ向かって円を描き、それを追って、白く柔らかな首が反り返る。
一種の舞いを見ているようだ。
そんなものに興味を持ったことはないが、京都の舞妓と言う人が踊る姿はきっとこんな風なのだろう。
手の中の硝子玉がいさなの熱を吸って熱くなっている。
上級の人たちがいつか教えてくれたよぅに、股間のものが硬くなりはしなかったが、それはいさなの体がまだ幼いからにすぎないのだろう。
彼ははやせの泳ぎに昂ぶっている自分を確信した。
男だとか女だとかは関係ない。はやせの動きにはそんなものを超越した魅力がある。
（やっぱり人間じゃないな）
いさなはそれを確信してフーッと安堵の息を吐いた。
はやせは人間じゃない。
そう思うと安らぐ。
「人間じゃない＝そうた」だからだ。
いつ自分を引きずり込んでくれるのだろう。
いつになったら本物のそうたと会わせてくれるのだろう。
自分はもう気付いているのに。
はやせが幽霊だと知っているのに。
早く連れて行ってもらいたい。
今すぐにでも、この投げ出した足を掴んで欲しい。
白く、冷たい手でしっかりと掴んで……。
ほら、目をつむっているから。気付かない振りをしているから……。
いさなはそのままうっとりと目を閉じた。

「いさな？眠っているの？」
どれほど経ったのだろう。不意に腹の上に冷たい滴がポタッと垂れた。
うとうとしていたいさなは「ヒャッ」という変な声を出して飛び起きた。
可笑しげに笑う声が木霊す。
幾重にも重なって響く笑い声がボーっとしてはっきりしないいさなの意識を更に朦朧とさせた。
この声は一体誰の物か？
「……そう、た？」
夢現に口を吐いた言葉はいさなの頭には残らなかった。
それだけ自然に慣れ親しんだ言葉だったから。
靄のかかる頭を、ブルンブルンと２、３回激しく振ると、ようやく意識がはっきりとした。
目の前にはよく見知った顔がある。

「はやせ？どうしたよ変な顔して」
しかし、いつも光のように輝いているその顔は、何故か曇り空のように精彩を欠いていた。
放心したように自分の顔を見つめているはやせの赤い瞳を睨んでから、いさなは腹の上に垂れた忌々しい水滴を手の平で拭った。
「――」
「え？」
いつもは歯切れの良いはやせの声がくぐもって聞きづらい。
そこで、いさなが問い直すと、今度は怒気を孕んだ叫びが洞窟中を震わせた。「僕はそうたじゃない！」

その耳をつんざく叫び声が、岩壁にぶつかりながら上へ上へと登って行き、天井にある、岩の合わさり目にできた微かな隙間から完全に外界へ吐き出されるまで、いさなは呆然としながらも何故はやせがこんなにも怒っているのかを考えていた。
何かをした記憶はない。
それなのに何故、はやせは自分の心内を見抜いたような物言いをするのか。
そして、どうしてそうたではないなどと言い張るのか。隠したところでもう無駄なのに。いさなははやせの正体を知っているのに。
「……何、言ってんだよ」
それとももしかしたら正体がばれるといけないのだろうか。
昔話では必ずそうと決まっている。
物の怪は、正体がばれると人の前には居られない。
山(この場合は海か)に帰らなくてはいけない。姿が霧散してしまう。様々だが、もう二度とその人の前には姿を現さないものと相場が決まっている。
「はやせがそうたのはずないじゃないか」
いさなは微かな恐怖を顔面に浮かべ、彼を見上げた。
無くしたくないのだ。
この、目の前の彼を。
「だって、今僕のことをそう呼んだじゃないか。前にもいさなは僕がそうたに似ているって言ってたよね？」
「……俺が？はやせを、そうたって呼んだ？――呼んでない！」
確かにはやせとそうたが似ているとは言ったけれど、そうたと呼んだ記憶はない。
「呼んだよ！結局はいさなにとって僕はそうたの代わりなのだろう？」
突然話が飛躍してしまって、いさなは何も言い返せない。
たかだか（記憶にはないが）はやせをそうたと呼び間違えただけで、どうしてそこまで話が跳んでしまえるのだろう。
いさなの困惑を嗅ぎ付けたのか、はやせはハッと鼻で笑った。
「気 付いていないと思ってた？いさなはいっつも僕のこと、放心したように見つめてる。誰だっ

てすぐに分かるさ。いさながはやせでなくてそうたを見ていることな んてね。それでも、気付いても、ずっと我慢してきたのに。……もうやめだ！僕はそうたなんかじゃない。死んだ奴なんかと一緒にするなよ！」

『死んだ奴』その言葉がズンといさなの心を重くした。
「……そうたが死んだなんて証拠、無いじゃないか。誰かに連れ去られただけかもしれないだろう？どうして、まだそうたがいなくなって一月も経たないのに、どうして皆諦めるんだよ」
「いさなこそどうして認めないの？そうたは死んでるよ。そこの、穴を抜けたところにさ……沈んでる」
どうしてなのか分からない。しかし、はやせの言葉には妙な真実味があった。
『沈んでる』という響きのもたらすリアルな恐怖がこれ以上自分を苛まないようにいさなは両手でしっかりと耳を塞いだ。
カツン。手にしていたビー玉が彼の手から落ちてはやせの足元へ転がった。
はやせはそれを黙って拾い上げると、憎しみのこもった瞳でその青いビー玉を睨みつける。
「こんなものがあるから、いさなはいつまでもそうたと離れられないんだ」
そして思い切ったように、はやせはビー玉を握った手を振りかぶった。
投げる気なのだ。海の中へ投げ込む気だ。
「やめろ！」
慌ててはやせに踊りかかったときにはもう、青い球体は彼の手を離れていた。
いさなの見守る中で球はゆっくりと海面へ向かって落下していく。
そして――トプン。
あの大きく振りかぶったはやせの体勢からはおおよそ想像もつかないほど静かに、青いビー玉は暗い深みへと飲み込まれてしまったのだ。

「何するんだ！俺のビー玉だぞ！」
「――いさなが悪いんだよ！僕をそうたなんて呼ぶから」
「……じゃあ、はやせは何なんだよ！」
グッと、彼が言葉に詰まる音を聞いた気がした。
「ほら、言えないんだ。そうたの幽霊なんだろう？」
そうでもなければこんなに不思議な姿をしているはずが無い。
いつかの夜の海にも都合よくいるはずが無いし、奇妙な魚の話にそうたと同じような反応をするはずは決して無い。
それら全てが一貫して起こりうることが、あるはずない。
しかしはやせは、ゆるく頭を振った。
「違うよ。僕はただいさながして欲しいようにしただけだよ。そうたを欲しがってたから、その通りにしただけだよ」
「俺の望んだ通りにしていた？何だよそれ。俺の何が分かるって言うんだ！」
このとき、初めていさなははやせを気味悪く思った。

今の会話。まるで自分の心を読んでいるようだ。
こんな風にして、自分の望みを読んでいたと言うのか。
「――何でも分かるさ。いさなのことなら、全部分かる」
真白い顔が口のところだけニイッと笑っている。
ゾクッと背筋に悪寒が走った。
じりり。いさなは後ろへ後ずさる。
「ごめん。怖がらないで。ただ、いさなと仲良くなりたかっただけなんだ」
水際までさがったいさなの方へ、求めるように白い腕が差し出された。
「ば……化け物！」
その腕を勢いよく振り払って、いさなは水に跳びこんだ。
一瞬、はやせの泣き出しそうな顔が視界を掠めた。

へたりと座り込んだはやせは、虚空へ向かって呟いた。
「だっていさな、ずっと死にたがっているじゃないか。僕はいさなに死んでほしくないよ。そうたに連れて行かせたくないよ」
ハァッと深い溜息を吐くと、知らず涙が頬を伝った。
（海の神様、海の神様。いさなを守ってください。そうたに渡さないで下さい）

白影

明日から盆に入る。その準備で母は朝から忙しそうだった。
仏間にはいつもと違う祭壇が設けられ、鬼灯や浜茄子の身が飾られている。
そのお飾りの赤と白を、畳の上に大の字になったいさなは漠然と見上げた。
眼前にちらつくのははやせの白い影。
（送り火の——花火の約束をしていたのにな）
あんな風に言い争ったのでは実現は不可能だろう。

家で静かに考えてみて、いさなはあの時の自分自身を深く悔やんでいた。
確かに、自分ははやせとそうたを重ねてはいなかったか。
あの二人があまりにも似ているから、はやせをそうたの幽霊だと勝手に決めつけてはいなかったか。
——逃げていなかったか？
そうたがいなくなる恐怖から、逃げ続けていたのではないか？
体を『く』の字に折り曲げて、彼は自分の膝を抱えた。
焼けた畳の匂いがする。我が家の匂いだ。
いさなの頬を、一筋の涙が伝った。
「だって……幽霊でも良かったんだよ。幽霊でも、いないよりはいいと思ったんだ」
どれだけ傷つけただろう。
はやせがそうたの幽霊でなかったならば、どれだけ彼を苦しめただろう。
あんなに親しくすごした日々を、彼はどんな気持ちで送っていたのだろう。
『化け物』と言ってしまった。
はやせは、どう思っただろう。
「謝らなきゃ」
家にいるだろうか。それとも浜か。洞窟だろうか。
行って一言謝るのだ。
「ごめんなさい」と。「はやせははやせだ」ときっぱり言うのだ。
もう、彼の正体が何だろうとかまわない。
幽霊だろうと、妖怪だろうと、天使だろうと、どうでもいい。
はやせははやせだ。いさなにとって、はやせはただ一人しかいない親友だ。

すでに夕日が傾いている。
寝転がっているいさなの影さえも長く伸びていた。
けれど、どうしても海へ行きたいと思った。
行かなければならない、と。

「いさな！何処へ行くの！」

母が血相を変えて叫ぶ声も耳に入らない。
とにかくはやせと会わなくてはならない。いさなは靴も履かずに家を飛び出した。

「はやせ！」
海岸に人影はない。洞窟にも誰もいない。
水に潜っているのかと数十分海面に目を凝らしたが、とうとう姿は見えなかった。
「家か……」
はやせの言っていた岬の家は、洞窟からずいぶん遠い。
それでもいさなは、足場の幾分引き締まった波打ち際をひたすら走った。
太陽はもう見えない。
夜は、刻一刻とその深さを増していき、すみれ色の空には星が輝きだしていた。
全てのものは色を失い、その影の中へ沈んでいく。
誰もいない海岸に響くのは、引いては返す無限の波のざわめきと、唯一人海岸線をひた走る、少年の荒い息の音だけだった。
暗い闇はあらゆる音を吸い取りながら、その深淵を確固たるものとしていく。
波の響きもいさなの喘ぎも、夜の魔物に喰い尽くされて、その広がりを失った。
あるのはその場に生ずる音。
響くことのない、線を持たない、点としての音。
ザッというその一点。
ハァッと息を吐くその一点にしかない音はしかし、何と生き生きと輝いているのだろう。
その一点の、そのもの自体の輝きは、何と確かなものであるのだろう。

「はやせ！」
やっと辿り着いた岬の家には、灯りが点っていなかった。
もうすっかりあたりは闇色で、遠くには村の灯りが臨める。
いさなは、ゆっくりとした足取りで庭に一歩を踏み入れた。
裸足に感じる下草は、うっそうと生い茂ってもう何年も手入れをしていないことが知れた。
はやせはここにはいない。
分かりきっている。
こんな所に人が住んでいるはずがない。
人でなかったとしても、はやせがこのようなところにいるはずない。
だって、このようにうらぶれた所ははやせには似合わないから。

いさなはがくりとその場に膝を突いた。
生温かい風が吹いている。
その流れにあわせてサワサワと幾千もの草たちがざわめいた。
自分を笑っているのだろうか。

みすみすはやせを手放してしまった自分を嘲っているのだろうか。
それも良いだろう、と、いさなは苦笑した。
本当に、自分は馬鹿だ。
そうたの時も、そして今度も、相手を失ってから気付くのだ。
どんなに彼等が大切だったかを。

（海に行きたい）
昨日からの嵐は、まだ健在だ。
窓の外でゴウッと轟いている。
時に空気の塊が勢いをつけて窓ガラスを襲うので、薄い煙硝子は割れないのが不思議なほど大きく震えた。
はやせは何処へ消えたのだろう。
そうたは何処に沈んでいるのだろう。
海だ。二人とも、海にいるに違いない。
何者にも代えがたい二人の親友のどちらも海にいるというのに、自分一人こうやって陸に閉じ込められている。
いさなは、家にいても聞こえるくらい大きな唸りを上げている海を目指す、痛いくらいの衝動を必死で押さえこんでいた。
海は今、魔物に姿を変えている。どんなに海を知り尽くした漁師でも、海の魔物には敵わない。
普段、あんなにも穏やかな海は、今日、この嵐の中でとぐろを巻き、山を作り、谷を出現せしめ、常にはその腹の奥深くに秘められている乱れた流れを、その体表に現しているだろう。
こんな日に海浜に立てば、たちまちのうちに真黒な手が、いさなの足を掴み、手を掴み、口を塞いで死の淵へと引きずり込むだろうことは目に見えて明らかだ。
しかし、それが分かっていても、それが分かっているからこそ衝動が生まれる。
いさなの中の血が、海へ海へと一斉に疾走をはじめ、体中がツキツキと痛むのだ。
海で自分を待っている二人の親友を、いさなの中の暗い部分が忘我の体で求めている。
彼らの後ろに見える『死』。その、更に奥に見える『融合』に向かって、ひた走ろうとしている。
いさなは懸命にその衝動に耐えた。
いさなが、というよりいさなの本能が死を許さなかったのかもしれない。
人間がその本性として捨てることのできない生への欲求。それが辛うじて、いさなと海とを引き離していた。

二日に渡る嵐の後、空はこれまでになく青く冴え渡り、海は鏡のように平らかだった。
カモメは宙を滑らかに滑り、久々にやってきた心地よい潮風を、体一杯に感じていた。
海辺はあまりにも穏やかで、あの嵐の後なだけに、間が抜けたようにキョトンとしていた。
昨日の海鳴りが夢のようだ。
実際、波打ち際から遠く離れて打ち寄せられた海藻や生物の死骸がなくては、嵐があったことな

ど誰が信じようか。
いさなはすっかり鎮まった海をぐるりと見渡してから、足元のゴミを洞窟へと辿った。
嵐のあった翌日の海は、見かけと違ってゴミゴミしている。
引きちぎれた海藻や、海の砂に降り積もっていたはずのゴミが満遍なく漂っている。
それは予想していたので、いさなはいつもはつけない水眼鏡を着けて秘密の洞窟への隧道を抜けた。

穴の中は、日の光が乏しいせいか未だ乾ききっておらずじめじめとしていた。
つい先日まであんなにキラキラしていたこの場所も、今では疲れきって色褪せている。
もしもここにはやせが居たら、こんなに惨めな場所にはならないのだろう。
いさなは湿った岩壁にもたれかかって、しばし幻想に浸った。

いさなは微かな希望を胸に、ゴミで前の見えない水の中を洞窟の内側へと急ぐ。
そして恐る恐る水面に顔を出し、暗く湿った岩穴をぐるり見回すのだ。
そして……飛び込み台の上に、一人の白い影を見つけるといい。
彼は、見慣れないいさなの水中眼鏡姿を示して笑うだろう。
「なんだい？その恰好。笑えるな」ケラケラと笑うはやせには、天井から光が筋となって降り注ぎ、銀色の髪に反射していさなを眩しくする。
笑う度に髪は揺れ、辺りに光が乱舞する

あぁ、そんな光景が今目の前に現実としてあれば、この洞窟はおどろおどろしくみすぼらしい穴倉ではなく、天使が羽を休める、神々しい鍾乳洞ともなるだろうに。
けれど実際の洞穴は、暗く湿り、水面にはゴミが浮かんでいる。
岩と岩の隙間には、気味の悪い船虫が群れを成して潜んでいる。
いい加減見切りをつけて、いさなは漸く立ち上がった。
やはり、はやせは消えたのだ。
何故なのかは分からない。いさなと喧嘩をしたせいなのか、それとは別に何かあったのか。もしかしたら最初から居なかったのかもしれない。
とにかく、いさなの世界から、はやせは去ったのだ。
少年は一つだけ迫り出した岩をゆっくりと登る。
はやせとの短い思い出が甦り、一足毎に涙が零れた。
締め付けられる胸があまりに痛いので、いっそ死んだほうがマシだとも思った。
実際のところ、いさなは未だに死を望んでいる。
終に、彼は岩の突端へ辿り着く。
漂っているゴミのせいか、周囲の暗い岩のせいか、それとも——、水面は常よりもずっと暗い。
いさなは手にした水中眼鏡は着けずに、それを足元に置く。
そして、一度大きく大きく息を吸い、ターン、と思い切り良く頭から飛び込んだ。

深く、深く、深く、深く、行ける所まで深く、いさなは潜る。
透明度は酷く悪い。
しかし、大きく口を開けた水路の入り口はすぐに分かった。
未だ息が続くようなので、いさなはゆっくり大穴へ近付く。
その縁へ手をかけて、恐る恐る中を覗いてみた。
――暗い。そして果てしない。

それは突然だった。
いさながもう水面へ向かおうと、顔を上向けたその刹那だった。
冷たい、手のようなものがいさなの足を鷲掴んだ。
ひんやりと、氷のように冷たいそれは、いさなの両足をしっかり掴んで、ぐいぐいと物凄い力で穴の奥へと引きずり込もうとする。
初めははやせかと思った。
過去に何度か、そんな経験があったから。
しかし、絡みつくものは執拗で、いさなの足から上へ上へと這い登ってくる。
そして一向に力を緩めない。
それどころか引きずる力は尚強く、穴の出口は見る見る遠ざかっていった。
決してはやせの筈がない。
（なんだよ、これ）
いさなはその正体を確かめようと、今では腰に巻き付いているそれを無理矢理引き剥がすと、自分の目の前へ引き上げた。

――手だった。
人の、白い手。
反射的に、いさなは掴んだそれを放す。
しかし、もう遅かった。
引き上げられた反動で、その白い手に続く個所が眼前にヌッと現れた。
白い――顔。
（そうた！）

初め、いさなはそれを見たとき、何かの誤りで死体を引き上げてしまったのだと思った。
何かが起こって、いさなの方から死体に絡みついてしまったのだと。
しかし、次の瞬間、いさなは水の中で悲鳴を挙げた。
閉じていた。確かに閉じていたそうたの目が、引きちぎれんばかりに大きく見開かれたかと思うと、その口端がまるで笑うように上へと持ち上げられたのだ。
こめかみには彼の白い肌を透かして血管が青く見て取れる。

いさなは恐怖に体を硬く硬直させ、意思の窺えない、白くにごった彼の目をただただ凝視した。
（いさな。いさな。いさな！）
頭の中ではそうたの声が響いている。
目の前の彼も口を動かす。
しかしその二つは一致していなかった。
実際のそうたの身体は、まるで鯉のように口をパクパクとするだけだ。
何の音も形作らず、ただ、機械的に開け閉めするだけの口。
先程いさなの前で見開かれた目は、未だにギョッと開かれて微動だにしない。
（いさな、僕を呼んでいたね？何度も呼んでいたね？僕と一緒に居たいって言ったね？）
そうたは再びニイッと笑うと、その唇を近付けてきた。
（一緒に居ようよ。海の底で、二人で居よう？）
（そうた？）
（一つになれるよ。いさなの望んだ通り、一緒になって、二度と離れないで居られるよ）
そうたの声が、いさなを包む。
なんて安らぐのだろう。
逆らえない。彼に、逆らうことなんでできない。
そうたをなくして、いさながどれだけ辛かったか。
あんな想いを引きずるくらいなら、死んでもいい。化け物になってもいい。
そうたと一緒に居られるなら、何だっていい。
（一緒に居てくれるだろう？）
そうたがいさなの唇を吸おうと更に顔を近付けてきた。
それは、何かの儀式なのだろうか。多分、そうなのだろう。
いさなは恐怖で引きつった身体の緊張をすっかり解くと、ただそうたへ身を任せた。
一緒に居られるなら、何だって差し出すよ。

と、不意に、いさなは上方へ身体をグインと引き上げられた。
そうたと同じように冷たい手。
（死んじゃ駄目だよ、いさな！）
（――は、やせ？）
うん。と頷いたはやせは、いさなの脇に両腕を差し込んで、上へ上へと向かっていく。
一方のそうたは、下へ下へといさなの身体を引き千切れんばかりに引いた。
（死んじゃ駄目だ）
（――だって、そうたが呼ぶんだ。このまま行けば、そうたと居られる！）
（だめだよ！）
グッと、はやせの腕に力が込められた。
彼に引かれたいさなの身体は、そうたと切り離されて上へ押しやられた。
その代わり、はやせがいさなの居た位置に居る。
（は……はやせ！）

いつの間にか、はやせの白い身体にはそうたの白い手足が絡みついていた。
大きく開いたそうたの目は、無表情に彼を眺めているが、口元は嬉しそうにほころんでいた。
（君が来てくれるの？いいよ。僕、一人じゃないなら誰だっていい）
（はやせ！はやせ！）
いさなは必死で手足をばたつかせた。
どうにか彼らに追いつこうともがくのだが、しかし、どんなに水を掻いても一向に前進はしない。
それどころかいさなの身体は、水面に向かって上がっていくのだ。
（はやせ！どうしてお前が俺の代わりにならなくちゃいけないんだよ！）
二人の身体は溶け合い、その境界を失って真白な一つの点となっていく。
そして、段々と暗く霞んでいった。
（はやせ！）
（……いさ、な）
静かな声が、いさなの耳に届いた。
視線をずらせば、そこには何か、白く光るものがある。
眩しくて、その輪郭は確かではないが、どうやらそれが、声の発信源らしい。
（いさな、泣かないで）
（はやせ？）
白い光は、いさなを包み込むように、彼の周囲を螺旋を描いて巡っている。
（泣かないで。いさなが悲しむと、僕まで悲しくなるよ）
（だって……）
（大丈夫。君は強い子だもの。僕やそうたがいなくてもやっていけるさ）
（はやせは？はやせはどうなるの？）
（大丈夫だよ。僕は泳ぎが上手いもの。逃げてやるさ）
（そんな！）
フッと、はやせの笑う気配が伝わってきた。
それと同時に、身体が一気に上へ上った。
何か見えない力が、いさなを引いているらしい。

二人の姿はもう見えない。
彼等が沈んで行った一点は、今はもう、何処よりも暗く落ち込んでいた。
いさなはもう一度、はやせとそうたを呼んだ。
しかし、二度と再び彼等が現れることも、白い光が漂うこともなかった。

じりじりと強い日差しが、いさなの肌を刺していた。
ふと気が付いたいさなは、波打ち際に倒れている自分を見つけた。
どれほど長くこうしていたのだろう、ひんやりと湿った腹とは逆に、彼の背中は日に焼かれて痛みさえ訴えている。

よろよろしながら立ち上がると少年は、青い海原を遥か遠くまで見渡した。
夢でない事は、いさな自信が一番よく分かっている。
これから自分はどうしたらいいのだろう。
そうたを失い、はやせまでをも失った。
一人取り残されて、どうしたらいいのだろう？
とりあえず生きることだ、と、彼は拳を握り締める。
とりあえず生きよう。涙を零すことなく強く生きてみよう。
自分を救ってくれたはやせが、そう望んだ。
それなら自分は、彼の望みを叶えてやろう。
彼の言った通り強く生きて、いつか再び彼と会ったなら、この命をそっくり返そう。
「いらないよ」と言われそうな気がする。
首を横に振ったはやせは、いさなの差し出す命を優しく断るような気がする。
いさなは、はやせの正体が何であるのか、薄々感づいている。
恐らくそれが正解だろうと思う。
だから、きっと断られるだろう。

いさなは今一度、優しい眼差しを海へ向けて、その場を立ち去った。

送り火

夜はあまねく行き渡り暗い空には不恰好な月が地上を冷たく照らしている。
深い闇と青白い月光と、二つは密に混ざり合い、世界はまるで海の底に没していた。
少年は冷たく澄んだ海の水の中、ソロリと起き上がると、押入れの中に長らく封じられていた花火の束を取り出した。

裸足は好きだ。その下に感じられる死んだ大地の冷たさが好きだ。
こんなところからも、死は甘くいさなを誘う。
けれども、二度と再び少年が、その罠にはめられることはないだろう。
生への確かな執着を、いさなは背負っているのだから。

いつかそうたと座った浜に、そして以前はやせと語ったあの浜辺にいさなは一人で降り立った。
海から吹きつける軟風が、耳もとを柔らかに掠めていく。
マッチを擦った。静かな香りが鼻腔をくすぐる。
シュウッという音を出して、手元の花火が火を吹いた。
白、赤、緑と、次々に色を変えていく。それと一緒にいさなの顔も、様々な色に染められた。

『ねえ、いさな……花火をしようよ。十六日の夜にさ』
『盂蘭盆って言うんだって。母さんに聞いたんだ』
『十六日には火を焚いて、その霊をまた送り返してやるらしいんだ。だから、僕らもそうたを送ってやろうよ』

「うん。送ってやろう。そうたも、はやせも」

一本、一本、花火が消えていく。
同時に、自分とそうたをつなぎ合わせていた鉄の鎖も、一本、また一本と消え去って行った。
そして、最後の一本に火がついた。
パチパチと弾ける音を出して花火は白い閃光を噴出した。
目が覚めるような強烈な光だ。
いさなの目を覆っていた黒い影が晴れていく。
今、漸く彼は、一つ何かを吹っ切ったことを自覚した。

吹きつける潮風が心地よい。
朝日が徐々に昇ってきて、辺り一面がまるでうまれ出たばかりのように眩しい金色に輝いていた。
ふと、浜を歩くいさなの前方に強烈に光を放つ一点があることに彼は気付いた。
全てが金色に輝く中で、何故かそこだけ青く輝いている。

「――あれは！」
まさか、と思った。
まさかあれがこんな所にあるわけが無い。
しかし、近寄る毎に姿が鮮明になっていくそれは、確かにあの日、はやせが海へ投げ込んだビー玉だった。
いさなはゆっくりと大きなビー玉を拾い上げた。
太陽の光を反射して、いさなの顔が斑もように青く染まった。
（もう、いらないんだよ。そうた）
拳を握って眩い光を覆い隠すと、いさなは持てる力一杯にそれを遠くへ投げ飛ばした。
『青い心臓』と名付けられたそれは、日の光をはね返しながらずっと遠くへ飛んで行く。
それが向かう方向には、黒い岩が微かに頭を覗かせていた。

そして――

「あっ」と思ったその瞬間、『青い心臓』はその岩に打ち砕かれた。
飛び散った破片は、太陽の光と、波が跳ね返すきらめきとを複雑に反射させ、浜辺を青い光で包み込んだ。
奇跡はほんの一瞬だった。
青い光で包まれたのは、ほんの束の間のことだった。
すぐに世界は平常を取り戻し、大部上に昇った太陽に、すでに神々しい輝きはない。

ホウッといさなは息を一つ吐き出して、満足げな笑みを浮かべると、村への道を辿り始めた。
もう朝だ。
早くしないとラジオ体操に遅れてしまう。

皆勤賞は、ゴーグルだ。